

Keio
Research
Center
for
the
Liberal
Arts

慶應義塾大学
教養研究センター

**2016 年度
活動報告書**

2016年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

はじめに

慶應義塾大学教養研究センター所長 小菅隼人

2016年度活動報告書をお届けします。

塾祖福沢諭吉は、「独立」の精神を、「自分にて自分の身を支配し、他に依りすぎる心なきを言う」（『学問のすゝめ』）と敷衍して、行動においても思想においても、権威・因習に依る隷属を戒めました。その上で、慶應義塾の基本精神を「独立自尊」と定め、「心身の独立を全うし、自らその身を尊重して人たるの品位を辱めざるもの」（『修身要領』）と説明しました。様々な局面で私たちを飼い慣らそうとする呪縛に気づき、気品をもって自らの力で歩み出していくこと——独立自尊の土台となるのが、福沢の言う「学問」、すなわち、「教養」です。しかし、現代においては、教養は、独立自尊の根拠として人間にとって絶対的に必要なものでありながら、その形式も機能も目的も正確に定義されることなく、しばしば漠然とした知識の集積と捉えられています。教養研究センターは、「教養とは何か?」「教養はどのような役割を果たしてきたのか?」「教養は何のために必要か?」という疑問に明確な答えを与えるための研究を行うこと、そして、真の教養教育を実践する方法を見出すことを使命としています。

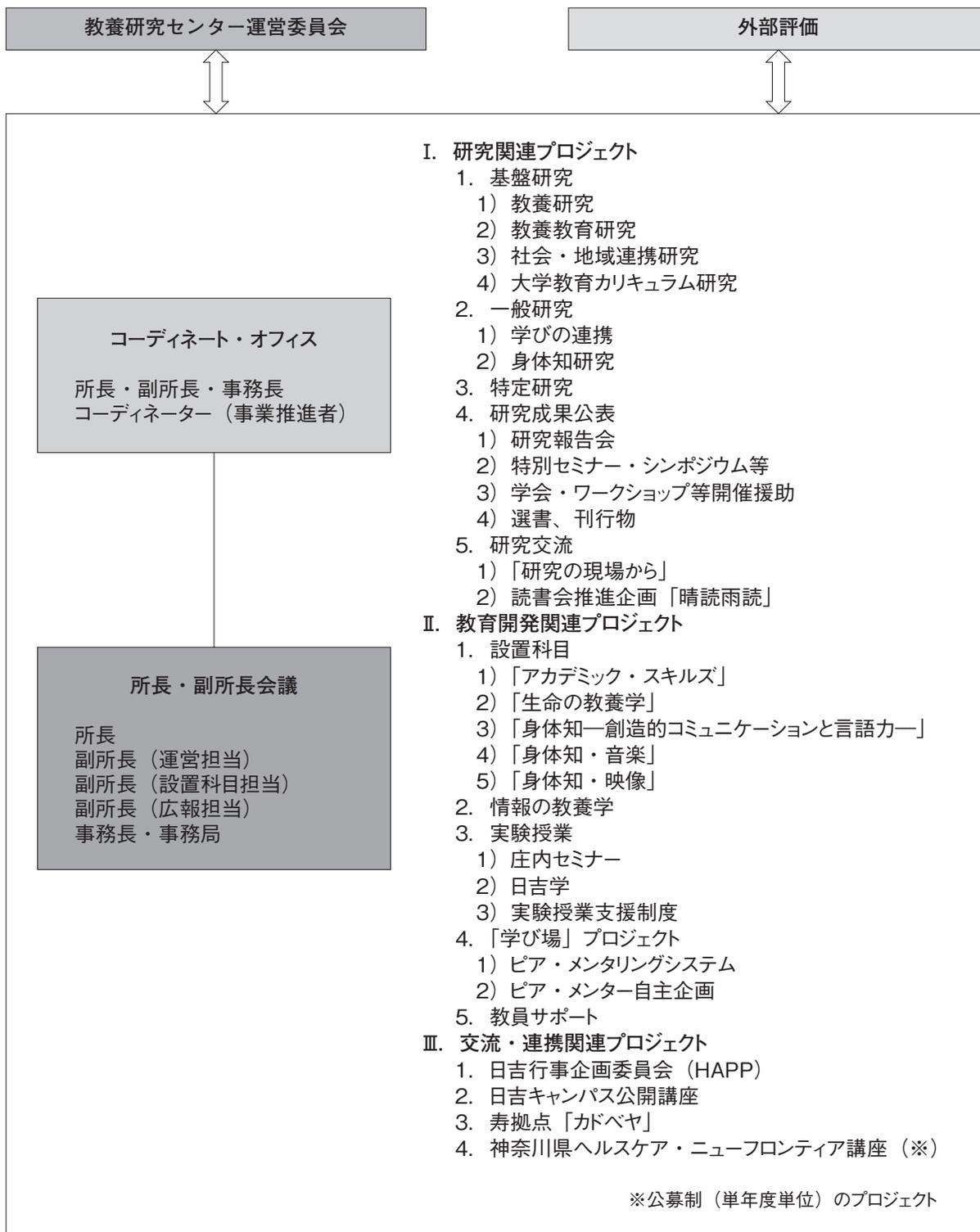
2016年度は、例年の活動を鋭意進めると共に、2017年度より立ち上げる基盤研究・教養研究会の準備を行いました。また、日吉学の再整備、カドベヤの将来計画にも着手しました。センター選書も二冊刊行しました。また、神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座のように、とても充実した公開講座と研究会を行い、しっかりと報告書に纏めて終了したプロジェクトもありました。私たちの活動をご覧いただき、ご意見、ご助言を賜れば幸いです。今後とも教養研究センターにご協力くださいますようお願い申し上げます。

目 次

はじめに	03
組織構成と事業計画	06
2016年度事業報告	07
広報・発信	10
I 研究関連プロジェクト	
基盤研究・一般研究・特定研究	12
研究成果公表	
学会・ワークショップ等開催支援	14
研究交流	
研究の現場から	15
読書会推進企画「晴読雨読」	16
II 教育開発関連プロジェクト	
1 設置科目	
1-1 アカデミック・スキルズ	17
1-2 生命の教養学	18
1-3 身体知—創造的コミュニケーションと言語力—	19
1-4 身体知・音楽	20
1-5 身体知・映像	21
2 情報の教養学	22
3 実験授業	
3-1 庄内セミナー	24
3-2 日吉学	26
4 「学び場」プロジェクト	27
5 教員サポート	28
III 交流・連携関連プロジェクト	
1 日吉行事企画委員会（HAPP）	29
2 日吉キャンパス公開講座	31
3 寿拠点「カドベヤ」	33
4 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座	34
資料編	
1 慶應義塾大学教養研究センター規程	37
2 運営委員会委員	39
3 組織構成員	40
4 2016年度 of 主な活動記録	42

※ I～IIIの分類は機能カテゴリーであり、センター内部の組織ではありません。1つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では、便宜上各プロジェクトを3つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

教養研究センター組織構成と事業計画（2016年度）



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

詳しい報告は各項目に譲るとして、ここでは、当初計画による形式上の分類に捉われず、内容から全体を概観して、研究活動、設置科目、啓蒙サポート活動、地域連携活動、その他として概要を述べる。

1. 研究活動について

- A) 2016年度も前年度同様「大学教育カリキュラム研究」については特段の研究活動はない。しかし、日吉のカリキュラム作成において大きな改革ポイントとなった日吉カリキュラム検討委員会の設置は、教養研究センターの基盤研究の一つの成果であり、大学における教養とカリキュラムの関係の重要性に鑑みて、今後も教養研究センターの事業として維持する予定である。経済学部の Pearl や GIC が進む中、今後、グローバル化とカリキュラムの関係を集中的に考えなければならない時期が来ることが予想される。
- B) 2016年度は、2015年度から念願であった「教養研究会」の具体化を目指して企画立案を進めた結果、キックオフとしての研究講演会を2017年度早々に開始できることとなった。実施の詳細は、次年度に譲るが、各学期1回（年2回）の研究講演会、年1回のシンポジウムを開催し、質疑応答も含めてそれらの成果を蓄積していく計画である。古来、「教養」は常に「教育」と結びついてきた。その意味で、教養「教育」は、実践的な教養「研究」の出発点であり到達点であると言ってもいい。この点を踏まえ、現在の教養研究センターは、多彩でユニークな教育活動の創造・展開に大きな重点が置かれているが、それと同時に、所謂「教養」という概念を明確化する学問的研究活動が必要という認識は今後も堅持するつもりである。

2. 設置科目について

- A) 「アカデミック・スキルズ」：教養研究センターの教育活動の中で、最も大きな位置を占める「アカデミック・スキルズ」は、前年度同様、「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」「アカデミック・スキルズ（英語）Ⅰ・Ⅱ」が開講された。また、学生主体の「プレゼンテーションコンペティション」と「論文コンペティション」も実施され、さらにこの授業の充実化がはかられた。
- B) 「生命の教養学」：「飼う」を2016年度のテーマ

に、オムニバス講義が行われた。多くの薬学部生を含めた80名強の受講者によって、生命の営みを教養という観点から再検討する授業となった。2015年度に引き続き、日吉メディアセンターの協力のもとに、この授業の中で、新入生を対象として「情報リテラシーセミナー」を行った。

- C) 「身体知」：2016年度は、武藤浩史教授を担当講師として、集中講義として実施された。ビートルズをテーマとして、身体を使った音楽理解を取り入れることで、20世紀最大の文化現象を、座学と身体の両面から学ぶ試みであった。武藤教授の綿密な講義設計によって、通信教育課程の学生と通学生が共に学ぶ貴重な機会ともなった。
- D) 「身体知・音楽」：「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」は、教養教育の一環として音楽芸術の良き理解者を、未来社会に派遣するということを目指している。さらに、2016年度は、いわば応用編として、龍角散寄附講座「身体知・音楽Ⅲ・Ⅳ」も新たに設置された。音楽大学以外で、実践をも含めたこれ程充実した音楽教育を行っている大学は他に無いのではないかと自負している。音楽を通して教養教育のさらなる展開が期待される。
- E) 「身体知・映像」：相変わらず、学生たちの映像リテラシーに寄せる関心の高さをうかがわせた。佐藤元状担当講師のもとで同じ文学作品を2つのグループで映像化する試みによって、集団制作の技術をも学ぶことができた。川端康成の「非常」の翻案を通して2つの短編映画が制作された。

3. 啓蒙・サポート活動について

- A) 「日吉キャンパス公開講座」：慶應義塾の知を広く社会に公開する、日吉における代表的活動としてこの講座がある。主として一般を対象とした有料の公開講座である。2016年度は、山下一夫准教授を中心に「地方の力と「再生」」をテーマとして、10月から12月まで8週、計16名による講演を行った。大好評であった前年に次ぐ多くの申込を受け、このテーマに対する関心の高さを伺わせた。
- B) 「神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座」：2016年度、前年に続いて、「神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座」に申請して採択された。この講座では、「文化としての病と老い」という研究テーマのもとに、4回の公開講義、2

回のワークショップ、研究会が開催され、研究活動が行われた。公開講座においては平均100名以上の申し込みがあり、地域住民や学生を交えて活発な講義、討論が行われた。このプロジェクトは、2016年度をもって終了したが、2年間の概要は、各年度の実施報告書に纏められている。

- C) 「情報の教養学」: 2016年度は「情報とリスク」をテーマとして、講演会を6回実施した。各回とも聴衆が熱心に講演者の話を聞き、質疑討論も活発に行われた。年度初回に行った池上彰氏の講演会には1000人以上の学生が詰めかけ、講座運営という点からも本センターに一つのノウハウが積み重ねられた。ほとんどの講演はYouTube上で公開されている。
- D) 「教員サポート」: 教員を対象とした啓蒙活動である。本年度は、2017年1月18日に日吉学生部(学生相談室)との共催で、大岡真希子氏(カウンセラー)による「学生相談室と共に考える学生対応」と題した講演が行われた。綿密な準備と広い経験に基づく充実した内容であったが、参加者数の点で、開催時期等の工夫に課題を残した。次年度は春学期の開催を試みたい。
- E) 「学習相談」: 本年度も、日吉メディアセンター・日吉学生部との共催で行われた。学生を対象として、日吉メディアセンターと共同して行われているこの事業は、学生が自ら教えることで学ぶ「半学半教」の精神に基づき、教職員のサポートによって学生主体で行われている。慶應独自の学びの形を実践する事業として、また、「教養の方法」を模索する企画として、意義あるものと考えている。
- F) 「研究の現場から」 「学会・ワークショップ等開催支援」: 教養研究センターは、教職員を対象として、日吉キャンパスでの研究教育活動を活性化させる様々な支援活動を行っている。これは、当センターが支援することで所謂「ハブ」となって教職員を繋ぎ、教養の基礎概念である「多様性」のあり方を実現・模索するための試みである。詳しくは本文に譲るが、今後も継続させたい事業であると考えている。
- G) 「読書会推進企画『晴読雨読』」: 2016年度は、工藤多香子准教授を中心に読書会推進企画「晴読雨読」が実施され、レヴィナスの『倫理と無限フィリップ・ネモとの対話』が読了された。日吉キャンパスにおける読書会開催を促進することで

教員の研究交流の機会を増やすとともに、学生を含めた日吉キャンパス全体の読書習慣の活性化をはかる、教員支援プログラムである。これは、①センター主催読書会の開催、②所員主催読書会の支援として、2017年度はさらに広く展開する予定である。

4. 地域連携活動について

- A) 「庄内セミナー」: 教養研究センターでは山形県鶴岡市にある慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパスを拠点として2008年以来、庄内セミナーを開催してきた。2014年度に未来先導基金としての活動が終了し、2015年度からは、新たに経常予算を計上して実施された。この事業では、地域と大学が一体になって学生を教育し、新たな教育方法として一つのモデルとなることが期待されるが、その意味では、単なる地域連携・交流活動ではなく、また単なる教育活動の枠にとどまらず、教養研究活動として位置付けられると考えている。
- B) 「日吉学」: 2013年に開始した「日吉学」は、講義とフィールドワーク、グループディスカッションによって知識を体験と結び付け日吉の自然、地理、歴史を総合的に学ぼうという試みである。「日吉学」は実験授業に位置付けられ、授業形式・参加学生の年齢構成・教授陣の多様性に特徴がある。2015年度も活動は続けられたが、新たな整理と展開のため、不破有理教授を中心に、2016年度春学期に検討委員会を持ち、2016年度秋より設置授業化を目指して再開された。
- C) 日吉行事企画委員会(HAPP): 2016年度、前年の形式を引き継ぎ、新たな内容で展開された。1990年代にはじまった新入生歓迎行事は、日吉の各教員、職員、学生を繋ぎ、学部教育からこぼれ落ちた知を結びつける活動の受け皿として、その後、日吉行事企画委員会となり、今日の教養研究センターの一つのルーツとなった。具体的には、春学期は主に新入生歓迎行事、秋学期は企画公募行事を行っている。
- D) 「カドベヤ」: 2010年4月にコトラボ合同会社と慶應義塾大学により共同で設立されたオルタナティブスペース「カドベヤ」も継続中の重要な地域連携活動である。2016年度、前野隆司教授を中心にフィールドワークの場として機能し、前年同様、「居場所『カドベヤで過ごす火曜日』」が行

われた。「日吉学」同様、新たなコミュニティの創出という意味で、単なる地域連携・交流活動ではなく、また教育活動の枠にとどまらず、教養研究活動として位置付けられると考えている。

5. その他：特に日吉リサーチポートフォリオ（HRP）と広報発信活動について

2016年11月に行われた日吉リサーチポートフォリオ（HRP）には、所員の個人参加に加えて、「神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座」のワークショップとして行われた片山杜秀教授による、〈映画『楢山節考』（木下恵介監督）を見て老いを考える〉と、日吉学の展示が、教養研究センターから出展された。両方とも、充実した内容によって多くの参加者を得た。

さらに、2016年度の特筆すべき成果として、新たなセンターパンフレットの制作を行なった。2017年度には本格的に配布されて、教養研究センターの広報活動に資するものと期待している。教養研究センターにとって、出版やウェブサイトでの知の公開は社会的使命であると考え、前年に引き続き、ニューズレターの発行、教養研究センター選書の発行、事業のアーカイブ化なども継続しておこなった。

（小菅隼人）

教養研究センターでは、様々な活動の広報に努め、センターの意義を常に発信している。講演会や公開講座などはポスター、チラシによって告知するとともに、ウェブページを活用して最新情報を随時発信し、研究・教育活動の周知を行っている。

また、慶應義塾大学出版会と連携し、活動成果を公開する書籍などの出版にも力を入れている。2016年度の刊行物は以下の通りである。

《教養研究センター 2016 年度刊行物》

1. Newsletter (ニューズレター)

■ 28号 2016年5月16日刊行

■ 29号 2016年11月30日刊行

日吉所属教職員とセンター所員を対象とした広報の一環として、Newsletter を年2回刊行している。

2. CLA アーカイブズ

■ CLA アーカイブズ 33

『教員サポート 18 「学生相談室と共に考える学生対応」』 2017年3月31日刊行

センターで行っている教職員を対象としたサポートワークショップの内容をアーカイブとして刊行している。

3. 極東証券寄附講座

【アカデミック・スキルズ】

■ 『2016年度「アカデミック・スキルズ」学生論文集』 2017年3月31日刊行

センターの看板科目である少人数制授業「アカデミック・スキルズ」では、一年かけて学生が論文を完成させる。これを学生自身が編集し、論文集として2005年度より毎年刊行している。

4. 報告書

■ 『教養研究センター 2015 年度活動報告書』 2016年8月31日刊行

■ 『2016年度「庄内セミナー」報告書』 2016年12月25日刊行

■ 『神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座「文化としての病と老い」2016年度業務完了報告書』 2017年3月24日刊行

5. 教養研究センター選書

■ 柳田利夫『教養研究センター選書 16 パルーの和食——やわらかな多文化主義』

■ 熊野谷葉子『教養研究センター選書 17 ロシア歌物語ひろい読み——英雄叙事詩、歴史歌謡、道化歌』

センターでは、研究の前線を一般にもわかりやすい形で紹介することを趣旨として選書を刊行している。原稿は毎年所員から募集し、選考を経て刊行を決定している。2016年度は2作が刊行された。

(高橋宣也)

2016年度教養研究センター刊行物一覧



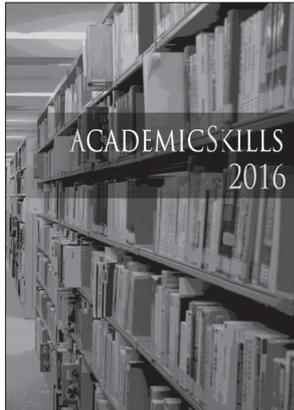
Newsletter 28号 (2016.5.16. 刊行)



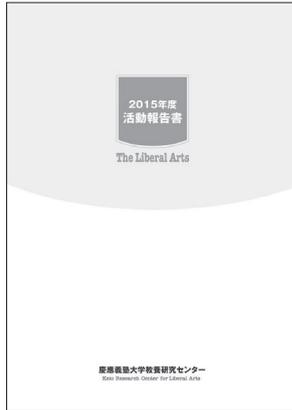
Newsletter 29号 (2016.11.30. 刊行)



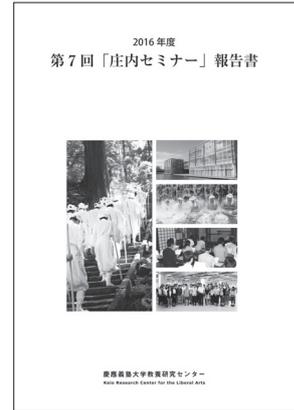
CLA アーカイブズ 33 (2017.3.31. 刊行)



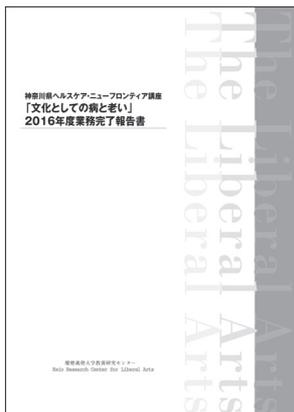
2016年度アカデミック・スキルズ
学生論文集
(2017.3.31. 刊行)



2015年度活動報告書
(2016.8.31. 刊行)



2016年度「庄内セミナー」報告書
(2016.12.25. 刊行)



神奈川県ヘルスケア・
ニューフロンティア講座
「文化としての病と老い」
2016年度業務完了報告書
(2017.3.24. 刊行)



教養研究センター選書 16
『ペルーの和食
—やわらかな多文化主義』
(2017.3.31. 刊行)



教養研究センター選書 17
『ロシア歌物語ひろい読み
—英雄叙事詩、歴史歌謡、道化歌』
(2017.3.31. 刊行)

基盤研究・一般研究・ 特定研究

基盤研究

2016年度、「教養教育研究」「社会・地域連携研究」「大学教育カリキュラム研究」については特段の研究活動はない。しかし、教育と連携を中心とした研究活動は、社会の情勢を見ながら必要になった時に直ぐに立ち上げられるように常に枠組みを維持しておくことが重要だと考えている。特に、日吉のカリキュラム改革において大きな改善点となった日吉カリキュラム検討委員会の設置は、教養研究センターの基盤研究の一つの成果とも言え、大学における教養とカリキュラムの関係の重要性に鑑みて、今後も教養研究センターの事業として維持する予定である。経済学部でのPEARLやGICが進む中、今後、グローバル化とカリキュラムの関係を集中的に考えなければならぬ時期が来ることが予想される。「教養研究」については後述する。

一般研究

2016年10月27日(木)18:15～20:00、大野真澄君(法学部)により、「学びの連携」プロジェクト2016年度第1回公開セミナー「効果的な論文指導を目指して—日本語論文編」が行われ、学生、教員、職員を含めて20名ほどの参加者によって有益な討論が行われた。このセミナーについては続編を期待する声が多く、2017年度に繋がる企画となった。また、例年通り、申請のあった研究活動に対して、研究オフィス運営協議会の承認を経て、来往舎2階のプロジェクト研究室(204室、205室)とプロジェクト研究員室(202室)を、以下の一覧のとおり研究オフィスとして提供した。

特定研究

2016年度、この項目について特段の活動は行われなかった。

2016年度プロジェクト研究員室(202室)利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ	利用者氏名・所属	利用期間
鈴木晃仁・経済学部教授	日本の精神医療の歴史	後藤基行 (社会学研究科准訪問研究員)	2016/4/1～ 2017/3/31
鈴木晃仁・経済学部教授	近現代日本の放射線医療の歴史	盧詩霖 (社会学研究科准訪問研究員)	2016/7/20～ 2017/3/31
鈴木晃仁・経済学部教授	近世の家と病：医療の文化史	ヤング・ウィリアム・エバン (日本学術振興会外国人特別研究員)	2016/12/21～ 2017/3/31
小原京子・理工学部教授	意味フレームに基づく意味タグ付きテキストコーパスの構築	パスチエール クウィリ レイネ (理工学部協定学生)	2016/4/1～ 2016/11/25
小原京子・理工学部教授	意味フレームに基づく意味タグ付きテキストコーパスの構築	ピエール、リディア (理工学部協定学生)	2016/11/28～ 2017/3/31
木島伸彦・商学部准教授	英語学習とパーソナリティ尺度及びその言語脳神経科学的考察	水澤祐美子 (理工学部講師(非常勤))	2016/4/1～ 2017/3/31

2016年度プロジェクト研究室(204・205室)利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ	部屋番号
小原京子・理工学部教授	意味フレームに基づく意味タグ付きテキストコーパスの構築	204
森吉直子・商学部准教授	Corporate Visual Identity に対する消費者反応に関する国際比較研究	204
津田真弓・経済学部教授	慶應義塾における日本学教育の国際化に関する準備	205
阿久沢武史・慶應義塾高等学校教諭	地域と連携した日吉地区の戦争遺跡の研究と教育的活用	205

基盤研究・教養研究会の設置について

2016年度は、「教養研究会」を設置して「教養」の研究を始めるための準備をおこなった。以下の目的と方法に基づいて、2017年度には春学期に研究講演会、秋学期にシンポジウムと講演会を行う予定である。

【目的】「文化」、「古典」、「成熟」…といった言葉を足掛かりに、「教養」を定義しようとする試みはこれまで多く行われてきました。しかし、それらは、「教養」を一つの側面から見た性格を経験的、直感的に捉えたものに過ぎません。「教養」は人間にとって絶対的に必要なものでありながら、いまだその形式も機能も目的も性格も明確に定義されてはいません。そうであれば、研究機関としての教養研究センターの最大の目的は、「教養とは何か?」「教養はどのような役割を果たしてきたのか?」「教養は何のために必要か?」という疑問に明確な答えを与えられるだけの研究を行うことでしょう。2016年度秋学期より、基盤研究として、そのためのプロジェクトをはじめたいと思います。

【方法】「教養とは何か?」「教養はどのような役割を果たしてきたのか?」「教養は何のために必要か?」という問いに対して、演繹的な方法によらず、まずは、歴史、地域、対象を区切って、知識を積み上げ、それらを統合する形で、答えを模索していきたいと思います。多様な知の集合体である慶應義塾大学の研究力をもってすれば、例えば、古典古代、チューダ朝英国、江戸時代の武家階級…における教養の形や役割を積み上げていくことは、十分に実現性があり、また、大学生にとって必要な教養、研究者にとって必要な教養、慶應義塾生にとって必要な教養という区切り方も出来るでしょう。その中に、ある共通項があるという作業仮設のもとに、なるべく多くの知見を積み上げて、折に触れて統合的に振り返っていききたいと思います。

実施の詳細、フィードバックについては、2017年度の報告書において記すことにするが、教養研究センターの中心となる活動として鋭意推進する所存である。
(小菅隼人)

I 研究関連プロジェクト

研究成果公表 学会・ワークショップ等 開催支援

教養研究センターでは、所員が研究会・ワークショップ等を企画する場合、支援、奨励を行うことで所員の研究・教育の活性化を図っている。これについては、例年にもまして積極的な応募があり、7件の応募を採択した。所員による創造的な企画や意欲的な挑戦を奨励し促進することを趣旨としてい

る。このことは十分達成されているが、一方、コーディネート・オフィス会議で、趣旨と応募規定をさらに明確にするべきとの指摘もあり、2017年度の課題となった。2016年度の採択は以下の通りである。

(小菅隼人)

2016年度 学会・ワークショップ等開催支援一覧

申請者	会合名	開催日	場所	参加人数
笠井 裕之 (法学部)	クリスチャン・フェゲルソン講演会 《Filming Paris?》	2016年5月11日	来往舎 大会議室	塾内60名、 塾外5名
佐藤 元状 (法学部)	D. A. ミラー講演会 「隠されたヒッチコック」	2016年5月21日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内10名、 塾外40名
奥田 暁代 (法学部)	アメリカ研究ワークショップ	2016年6月16日	第4校舎独立館 DB203 教室、D301 教室	塾内300名、 塾外5名
渡名喜庸哲 (商学部)	Tagu Films ミャンマーの素顔： ミャンマー映画上映会	2016年7月5日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内20名、 塾外20名
朝比奈 緑 (商学部)	日本エミリー・ディキンソン学会 第31回大会	2016年7月9日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内6名、 塾外52名
杉岡 洋子 (経済学部)	Morphology and Lexicon Forum 2016 (形態論・レキシコンフォーラム)	2016年9月10日、 11日	来往舎 大会議室	塾内5名、 塾外50名
小林 拓也 (理工学部)	ミレイユ・ユシヨン氏講演会+荻野アンナ氏対談「ラブレーを読もう！—フランス・ルネサンス文学入門—」	2016年10月25日	来往舎 大会議室	塾内10名、 塾外15名

D.A.ミラー講演会
Hidden Hitchcock: The Long Wrong Man
隠されたヒッチコック

2016年5月21日(土)15時より
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎
シンポジウムスペース
(講演は英語、通訳あり)

D. A. Miller is John F. Hotchkis
Professor Emeritus and Professor of
the Graduate School, University of
California, Berkeley.

MILLER

後援: 慶應義塾大学教養研究センター
問い合わせ: 佐藤元状 matsuto@a7.keio.jp
入場無料、事前予約は不要です。

**ミャンマーの
新世代映像作家集団
Tagu Films 特集**

7月5日(火)18:30 上映開始 / 20:30 終了予定 申込み不要
会場: 日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース
上映終了後 映画解説やミャンマーの現状を伝えるトークセッションあり
上映ドキュメンタリー作品
The Special One (2015年 / 7分 / ミャンマー) 監督: ラーミン・ウー 翻訳: 荻野安子
This Land is Our Land (2015年 / 10分 / ミャンマー) 監督: ラーミン・ウー 翻訳: 荻野安子
Homework (2014年 / 4分 / ミャンマー) 監督: ラーミン・ウー 翻訳: 荻野安子
トークセッション企画: Deight Clark (DNR) 人、Learning Across Borders (P) 監、長島雅規 (Tagu Films Japan / ヴァーナー)

制作: Tagu Films 配給: Tagu Films Japan. Inspired by Learning Across Borders

主催: 慶應義塾大学教養研究センター
共催: Tagu Films Japan
後援: 慶應義塾大学教養研究センター
お問い合わせ: 渡名喜庸哲 tonaki@hub.jp

研究交流 研究の現場から

教員が自身の研究内容を自由に語る企画で、軽食を交えての議論も活発に行われる。

2016年度も例年通り春学期に1回、秋学期に2回開催され、毎回二人の発表があった。

■第1回 2016年6月1日（通算第16回）

講師：荒木文果（理工学部）

「15世紀ローマにおける聖人称揚と美術——フランチェスコ会の活動を中心に」

講師：大野真澄（法学部）

「アカデミック・ライティング研究と指導——『ジャンル』によるアプローチ」

荒木先生は15世紀ローマにおけるフランチェスコ会の聖人、シエナの聖ベルナルディーノ称揚のあり方について発表され、聖人伝が絵画化される際の様々な工夫や、単なる装飾と思われたモチーフに当時の聖人崇敬の盛り上がりが見られる可能性が指摘された。

大野先生はアカデミック・ライティングを指導する方法として「ジャンル」という概念に焦点を当てられた。そしてジャンルごとに論の組み立て方を学ぶことにより、論理的思考力が養われ、コミュニケーション能力の向上に繋がるという見解が示された。

■第2回 2016年10月19日（通算第17回）

講師：沼尾恵（理工学部）

「寛容な社会とは？」

講師：中川真知子（経済学部）

「文学と思想のあいだ——『クリティック』誌にみる書評の可能性」

沼尾先生は昨今よく聞かれる「寛容、不寛容」という表現に着目し、社会のあり方においてその内容の説明は一筋縄ではいかないことを指摘された。そして「寛容」という概念と形容詞としての「寛容な」社会がどのようなものなのかを考察し、その可能性と課題を提起した。

中川先生はバタイユへのアプローチとして彼が編集した書評誌『クリティック』を取り上げられた。彼の思想の核には一貫して「語りえぬもの」への関心があり、これをめぐる執筆活動としての書評誌編集に注目することから、バタイユ論の可

能性が論じられた。

■第3回 2016年12月14日（通算第18回）

講師：新島進（経済学部）

「デュシャン〈大ガラス〉と初音ミク——4次元と3次元と2.5次元と2次元」

講師：中谷彩一郎（文学部）

「古代ギリシア恋愛小説の世界——エクフラシスを中心に」

新島先生は「次元」をキーワードに、人工的に創造された女性とその表象について考察された。漫画アニメの記号絵は2次元で、2.5次元演劇は漫画を3次元化し、初音ミクはさしずめ2.1次元的存在。そしてデュシャンが「4次元の3次元への投影」と説明したオブジェ作品〈大ガラス〉。次元を隔てるガラスの役割や現代的な女性像の表れについて、刺激的な論が展開した。

中谷先生は古代ギリシア文学における「エクフラシス（描写）」の意味に焦点を当てられた。ローマ帝政下のギリシア語恋物語群における絵画描写の機能について考察され、『エティオピア物語』、『ダフニスとクロエ』、『レウキッペとクレイトフォン』でのエクフラシスの差異と効果について豊富な具体例とともに説明された。（高橋宣也）

研究の現場から

サロン日吉
円卓の会へご招待

「研究の現場から」は研究者交流サロンとして、毎回2名の教員の研究分野を紹介し和やかな雰囲気でお話する企画です。軽食をとりながら学部や分野を越えて交流を深めていただけます。

第十八弾 12月14日（水）18:15～ 来賓1階101

- ・新島進（経済学部准教授）
「デュシャン〈大ガラス〉と初音ミク——4次元と3次元と2.5次元と2次元」
- ・中谷彩一郎（文学部准教授）
「古代ギリシア恋愛小説の世界——エクフラシスを中心に」

★対象：教職員 / ★費用：無料 / ★申込：不要

日吉キャンパスでは大ぜいの教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。お互いの研究を知り、情報を交換し合うことで、さらに素敵なアイデアが生まれることもあります。例より、まず知り合いになることが、より豊かな研究教育への第一歩だと教員研究センターは考えます。ぜひお気軽にお立ち寄りください。

主催：教員研究センター toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

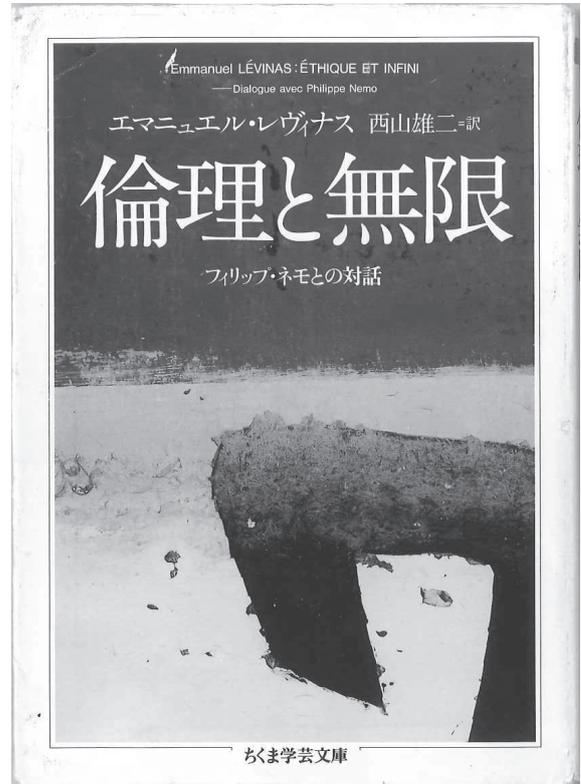
研究交流 読書会推進企画 「晴読雨読」

読書会推進企画「晴読雨読」は、日吉キャンパスにおける読書会開催を促進することで教員の研究交流機会を増やすとともに、学生を含めた日吉キャンパス全体の読書習慣活性化をはかるプログラムとして、2016年度にスタートした。企画第一弾では、エマニュエル・レヴィナス著『倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話』を課題図書とし、4月27日、6月3日、6月29日、8月3日、10月5日、11月9日、12月21日と計7回の読書会を開催して読了した。参加者は毎回異なったが、教員学生あわせて平均10名ほどだった。

本は薄く、文章も決して晦渋ではなかったものの、その内容は深く、理解するのが困難なテキストだった。そのため、一回に進めるのはわずかな量だった。それでも、毎回、レヴィナスを研究されている商学部・渡名喜先生が文章を噛み砕き、わかりやすくユーモアあふれる解説をしてくれたおかげで、いつも活発な議論を交わすことができた。議論が熱を帯び、2時間の予定を越えることもしばしばだった。最初はおとなしくしていた学生たちも、慣れてくると持論を語り、教員とも対等に議論するようになったのは喜ばしいことだった。一般の講義や授業のなかでは、教員と学生が対等な関係でともに考えるという場はなかなか実現し難い。それを考えると、参加した学生たちにとって、読書会は知的好奇心を満たすきわめて貴重な場になったことと思う。

最後に特筆すべきは、日吉キャンパスに通う1・2年生のなかにも大学生になったからにはやや難しい哲学書や学術書を読んでみたいという知的欲求をもっている学生が少なからずいることである。わずかな数であったとしても、このような学ぶことに貪欲な学生は開かれた議論の場としての大学にとっては宝である。彼らが大学に対する希望を失わないためにも、このような場を提供し続けることは大学の大切な使命だろう。今後は、さまざまな分野のさまざまな読書会が開催され、講義や単位の外からも学生の知的好奇心を満たす機会がさらに増えることを期待する。

(工藤多香子)



II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-1 アカデミック・スキルズ

前年度同様、英語1クラス、日本語3クラスを開講した。英語は火曜2限。教員は井口篤（文、採点責任者）、池田真弓（理、春学期のみ）、コミサロフ、アダム（文）、横川真理子（教養研究センター非常勤講師）。日本語は、水曜5限が大出敦（法）、片山杜秀（法、採点責任者）、中川真知子（経）。木曜5限が小林拓也（理）、酒井規史（商）、伏見岳志（商、採点責任者）。金曜5限が新井和広（商、採点責任者）、御園敬介（商）、太田啓子（文学部非常勤講師、7月8日から）、治山純子（教養研究センター非常勤講師、6月9日まで）。以上のうち、井口、池田、コミサロフ、横川、中川、酒井、太田、御園はアカデミック・スキルズを初めて担当。残る教員は有経験者で、新井以外は前年度からの継続である。授業内容は例年通りで、春学期に4,000字、秋学期に8,000字の論文作成を履修者に課し、特に秋学期には論文内容のプレゼンテーションも行わせることを原則とし、そのプロセスについては担当教員の裁量に委ねるかたちであった。履修者人数は、英語が9名、日本語が3クラスとも24名。年度末に論文提出に至って1年の課程を完遂した者は、英語が5名、日本語は水が14名、木が18名、金が17名。年度末には恒例に従い、コンペティションが論文とプレゼンテーションの2部門で開催された。論文部門は全4クラスの各々から2本ずつ参加。各クラスから担当教員1名ずつ計4名の合議による審査により、金賞2、銀賞1、審査員特別奨励賞1、佳作4が選ばれた。プレゼンテーション部門は全4クラスの各々から2名ずつ参加。当日会場に集まった教員と履修者の投票による審査により、金賞1、銀賞1、銅賞1、佳作5が選ばれた。両部門とも金賞に英語クラスから受賞者が出たのが、かつてなかった本年度の特徴であろう。授業も論文作成もすべて英語で行われる英語クラスは、履修者の負担も大きく、実りあるかたちにつながりにくいところも従来はあったが、学生の英語力の向上を背景に、状況が変わりつつあることが端的に示されたと言える。

（片山杜秀）

2016年度極東証券寄附講座

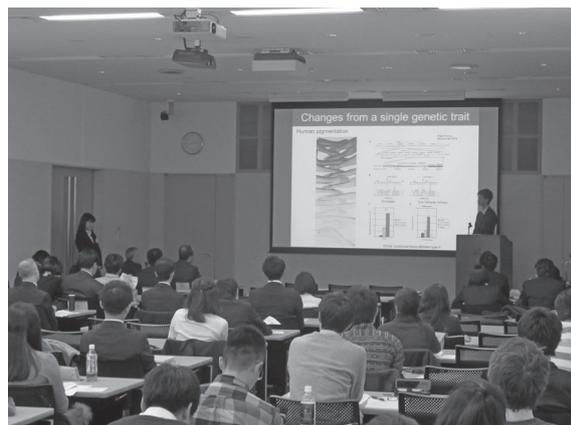
アカデミック・スキルズ
プレゼンテーションコンペティション

Academic Skills
Presentation Competition

学生が一年間培ってきた「知の探求能力」を遺憾なく発揮します

2017.2.6（月）14:00～18:00
場所：日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース
発表者：2016年度「アカデミック・スキルズ」クラスⅡ代表者

主催：慶應義塾大学教養研究センター



II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-2 生命の教養学

過去数年と同様に、11名の講師によるオムニバス講義形式をとって、2016年度の生命の教養学は「飼う」をテーマとした授業を展開した。講師のお名前と講義題目は以下である（敬称略）：齊藤朋子（moco どうぶつ病院院長、獣医師、NPO法人ゴールゼロ理事長）「ペットを飼うこと、地域猫と殺処分をめぐる現状」、瀨瀬雄三（明治大学農学部農学科教授）「国際競争のなかでの日本の養豚生産の現状と諸問題」、下田耕治（本学医学部准教授）「実験動物を『飼う』」、奈良雅俊（本学文学部教授）「飼うことの倫理学」、濱野佐代子（帝京科学大学生命環境学部准教授）「ペットとのコンパニオンシップから得られるもの」、大谷哲（立教大学文学部兼任講師）「古代ローマの奴隷—境遇の多様性と複雑性」、光田達矢（本学経済学部専任講師）「役に立たない動物ができるまで—近代ヨーロッパにおけるペット化」、田野大輔（甲南大学文学部教授）「ナチズムにみる欲望の動員」、平岡潔（(株)フジキンライフサイエンス創造開発事業部特任主査 技術士（水産部門））「チョウザメという食文化を作る戦略」、福田真嗣（本学先端生命科学研究所特任准教授）「『もう一つの臓器』腸内細菌叢の機能に迫る」、原由利子（反差別国際運動 IMADR）「日本人の人身売買を考える—問われていることは何か」。80余名（そのうち薬学部の学生が25名以上）の受講生は、全体を通じて、生殺与奪を握る「飼う」現実の複雑な様相を突きつけられることとなった。各講義後の質疑応答も活発であり、授業後に提出をもとめたコメントシートの内容も充実していた。

本年も、前年に有益であることを確認したので、日吉メディアセンターのご協力をえて「情報リテラシーセミナー」を4月中の昼休みに開催した。講義と関連する書籍等を探して読み、それを期末試験のなかで正しく引用あるいは参照することを今年も課した。試験後、総評と匿名化した優秀答案例をkeio.jpの授業支援システムにアップロードしフィードバックを行なった。例年通り、講義録の公刊が予定されている。企画委員の皆様のご協力に感謝を表す。

（赤江雄一）



大谷哲氏



平岡潔氏



原由利子氏

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-3 身体知—創造的コミュニケーションと言語力—

2016年度の教養研究センター設置科目「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」は、8月12日から17日までの6日間、毎日、初日から5日目までは毎日3限と4限、最終日は3限から6限までを用いた集中講義の形で実施された。

履修者は、通学課程の学生が10名ほどいた。それに加えて、併設をかけて履修可能になっている通信教育課程の学生が8名集まった。それぞれに履修希望理由を記した履修希望書を書いてもらい、それを精査したのちに、履修を許可した。授業のテーマは2014年度につづいて、20世紀後半の最大の音楽文化現象とも言えるビートルズである。

授業計画は次のとおりである。

初日（8月12日、金曜、13時から16時15分）

第1回：イントロダクション（授業概要、ビートルズ史概要）

第2回：『ビートルズは音楽を超える』①ばらばらにそろっている（『ニッポン無責任時代、『ハード・デイズ・ナイト』、レイ・チャールズ‘What’d I Say’など）。

宿題：『ビートルズは音楽を超える』完読（特に、「はじめに」と「第3章」）

2日目（8月13日、土曜、13時から16時15分）

第3回：『ビートルズは音楽を超える』②つながる孤高（‘She Loves You’映像、歌詞、‘I am the Walrus’映像『マジカル・ミステリー・ツアー』、歌詞）

第4回：『ビートルズは音楽を超える』②つながる孤高（アルバム Revolver、‘Across the Universe’など）

宿題：ビートルズの好きな歌・歌詞について、コメントの準備

3日目（8月14日、日曜、13時から16時15分）

第5回：『ビートルズは音楽を超える』③つながる孤高（好きな歌詞、歌、シェアリング）

第6回：身体ワークショップ①（ていねいに生きる：呼吸する、歩く、食べる、触れる、木になる）

宿題：詩「ていねいに生きる」を創作

4日目（8月15日、月曜、13時から16時15分）

第7回：身体ワークショップ②（①の言語化とシェ

アリング）

第8回：身体ワークショップ③（Help ウォーク、Yellow Submarine 体操）

5日目（8月16日、火曜、13時から16時15分）

第9回：創作準備①

第10回：創作準備②

6日目（8月17日、水曜、13時から16時15分、16時半から19時45分）

第11回～第14回：創作発表会

初日から3日目の中盤までは、拙著『ビートルズは音楽を超える』を使ってビートルズのさまざまな側面（音楽、言葉、身体の動き）を学んだ。ビートルズはもちろん何よりも天才的な音楽家の集団だけれども、音楽だけが重要なのではない。イギリス、リヴァプールの進学校で学んだ聡明な彼らの書く歌詞や小説は十分に研究や分析の対象になる。また、映画やその他の映像に残っている彼らの身体の動きは、同時代の他のバンドと比べると際立っており、これも研究・分析の対象になる。その種の事柄を、最初の2日半で、わたしの講義を通して、概観した。

3日目の途中から呼吸など体の集中力ワークショップを開始した。3日目のワークショップは「ていねいに生きる—息をする、歩く、触れる、食べる」と題して、ヴィパサナー瞑想の呼吸法なども参考にして、静かな集中力とともに体の基本的な動作・行為に従事することの大切さを体感してもらった。4日目は眠っている創造力を刺激するダンスワークを、「イエロー・サブマリン」を用いたビートルズ版ラジオ体操や「ヘルプ」を用いた創作ダンスを通して、行った。5日目は創作準備の日とし、最終日の成果発表では、言葉、絵画、音楽、パフォーマンスなどさまざまな面でビートルズに啓発された色とりどりの豊かな成果を互いに披露し合い、かつ、それらを批評的に語り合った。創作とは深いレベルにおける自分史とつながっていること、そこにつながった時に人の心は揺さぶられるものであることを、改めて思った。また、いつにも増して、批評力と創造力をつなぎあわせることの大切さが痛感された。

（武藤浩史）

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-4 身体知・音楽

「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」、そして2016年度から新設科目として開講した「身体知・音楽Ⅲ・Ⅳ」は、音楽を通じて築き上げてきている歴史および文化を、実践を通じて学ぶことを目的としている。成果発表は、主に公開演奏会という形で行ってきており、演奏会には、社会還元の意味合いをも持たせてある。なお、2015年度に実験授業として開講した、「発展・声楽クラス」は、今年度より上記のように「身体知・音楽Ⅲ・Ⅳ」という正規科目となった。2016年度においては、「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」は住友生命保険相互会社による、「身体知・音楽Ⅲ・Ⅳ」は株式会社龍角散による寄附講座として位置づけられた。住友生命保険相互会社の寄附講座は今年度5年目を迎え、最終年となった。2017年度は極東証券寄附講座として、授業の開講は継続される。

「身体知・音楽Ⅲ・Ⅳ」は、声楽クラスの発展型の授業である。「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」の声楽クラスを履修したことがある学生のみ、受講できる仕組みとなっている。その一方で、「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」の声楽クラスと基本的には合同で授業が運営されている。つまり、声楽クラスの受講を希望する学生は、「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」および「身体知・音楽Ⅲ・Ⅳ」の両方の授業に参加することが前提となっている。

2016年度は、成果発表演奏会として器楽クラスおよび声楽クラス合わせて日吉において、計4回催した。具体的には次の日程で行われた。①2016年7月3日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・古楽アカデミー演奏会、「17世紀ヴィーン宮廷からの贈り物～ヤコブ・ルートヴィヒ手稿譜(1662)の器楽作品～」、②2016年7月16日：「身体知声楽クラス中間発表会」、③2017年1月8日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム古楽アカデミー・オーケストラ演奏会《知られざる、バロック・オーケストラのための舞曲》、そして④2017年1月15日：「慶應義塾大学コレギウム・ムジクム声楽アンサンブル演奏会」であった。

「身体知・音楽」は、専門的な音楽訓練を行う授業として設置され、教養教育の一環の音楽芸術の良き理解者を、未来社会に派遣するということを目指している。専門の音楽家と協同しながら学び、音楽が人間の身体を通じて伝えてきた身体知と文化の歴史を、身をもって学生たちに身に付けてきてもらっている。また、この授業は開講当初から、継続的な

学習ということを重視し、複数年にわたり授業に参加する学生が多くいる。これは、参加者が音楽の理解をより深めているということだけでなく、後から授業に入ってきた学生を指導するというような好循環が生まれてきている。地域貢献という視点からは、活動は確実に浸透しており、必ずしも知られているとはいえないが歴史的に重要な音楽作品の価値を、一般の方々に伝えてきている。

最後に、授業を通じ学生たちは、それぞれが果たしている役割を認識し、自分がどのような行動をとれば、全体として最も良いパフォーマンスをあげることができるかということを考えられるようになってきているという点を挙げておく。これは人間力の養成そのものであり、これこそが、慶應義塾大学教養研究センターが目指してきた「身体知」といえる。(石井 明)

慶應義塾大学
コレギウム・ムジクム
古楽アカデミー・オーケストラ
演奏会
知られざる、バロック・オーケストラのための舞曲

2016年7月3日(日) 18時開演(13時30分開場) 入場無料 予約料5,500円

藤原洋記念ホール(慶應義塾大学日吉キャンパス協生館内)
アコースティック・楽器演奏・現代音楽・現代音楽系下流・アンサンブル・日吉新・新設

住友生命保険相互会社・(株)龍角散寄附講座事業
クラシック・ヨコハマ2016 大学連携事業

慶應義塾大学コレギウム・ムジクム
アカデミー声楽アンサンブル演奏会

ヘンリー・パーセル (1659-1696)
アンセム(協奏曲に主として書く)
アンセム(ミサ曲に主として書く)
聖セリアの日のオーラ
《神への結びなき道えん》
歓迎歌《大聖なる反逆者よ失せよ》 他

カヴァー・ソング：上杉清人
テノール：大島博
バス：小笠原美敬
オルガン：廣津雅志
ヴィオラ・ダ・ガムバ：櫻井 茂
合唱：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム アカデミー声楽アンサンブル
指揮：慶應義塾大学古楽アカデミー・メンバー

2017年1月15日(日) 14時開演(13時30分開場) 入場無料(事前申込不要)

藤原洋記念ホール(慶應義塾大学日吉キャンパス協生館内)
アクセス：東急東横線・東急目黒線・横浜線日吉駅下車徒歩1分
【15時】教養研究センター/クラシックホール/協賛品販売/慶應義塾大学日吉キャンパス研究センター
【16時】慶應義塾大学日吉キャンパス研究センター 045-563-3112 / music@yagp.ac.jp

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-5 身体知・映像

2016年の身体知・映像クラスは、例年通りいやまたそれ以上にエキサイティングなクラスだった。

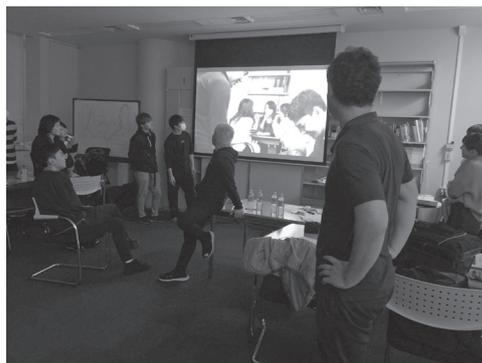
春学期は3つのグループに分かれて、三者関係をベースにした10分前後のオリジナル映画を作った。毎年、春学期の段階では、映像の質よりもストーリーの質を優先させるようにしている。基本的な機材の使用法を学びながら、映像として自然な演技とは何かについて学習する。そして、映像制作のグループワークのなかで自分の声を出していくことに慣れていく。

秋学期はいよいよ本格的な短編映画の制作に向かっていく。2016年度は2つのグループに分かれて、川端康成の初期短編小説「非常」を自由に翻案し、それを独自の映画作品へと作り変えていった。映像作家の小泉明郎氏、劇作家の松井周氏を講師として招聘し、美しい映像の作り方や演劇の自然な論理について講演していただいた。

こうして完成したのが、「ONE DAY」と「冬の陽炎」という2つの短編映画である。前者は、川端の原作の重要なモチーフである若い男女のすれ違いを現代の大学生活に置き換えた青春映画である。プロットにはもう少し粘りが欲しい気もするが、ロケーション撮影が功を奏した、たいへん美しい映像作品である。後者は、同じく男女のすれ違いを現代における図書館の一冊の本をめぐる切ない男女の恋の物語に置き換えた青春映画であるが、なんと全編広島弁で演出されている。脚本家の力が際立つ論理的な作品である。DVの問題にも踏み込んだ意欲作であることを付け加えておきたい。

この2つの学生作品は、アカデミック・スキルズプレゼンテーションコンペティションにて初上映した後、2017年4月6日に日吉キャンパス来往舎のシンポジウムスペースにて、一般公開した。2つの映画の上映後二人の監督のトークが行われた。質疑応答の時間にはたくさんの質問がフロアから投げかけられた。一年の締めくくりとなる充実したイベントとなった。

(佐藤元状)



2 情報の教養学

「情報の教養学」は、近年の高度情報化社会の急速な発展における最新的话题を提供することを目的とした講演シリーズである。

2016年度は、「情報とリスク」をテーマに6回の講演会を開催した。現在、SNS、メール、ネットサーフィンなど、様々な手法で誰でも簡単に情報を受発信できる。しかし、間違った情報の拡散、情報の流出、自分のパソコンの乗っ取りなど、自分の行動が思わぬ影響を与える可能性がある。そこで、インターネット利用者は、どのようなリスクが存在するかを知り、自衛する努力が必要となる。

春学期には、まず池上彰氏（名城大学）が、活版印刷、ラジオ、テレビ、インターネットなど様々な時代のメディアがどのような影響を世の中に与えたかについて解説した。中でもメディアは必ずしも中立な立場で情報を発信しているとは限らないため、人間が操作される可能性に注意すべきなどのリスクを紹介した。次に、福井健策氏（弁護士）は、パクリと著作権について講演した。著作権はもちろん守らないといけないのだが、法的に必ずしも盗作になるとは限らない場合でも、ネット上で炎上することもあり、そうなった場合の対処についても言及した。最後は、生貝直人氏（東京大学）が、忘れられる権利に関わる様々な問題について解説した。一度ネット上に流れた情報は Google などの巨大プラットフォーム企業が実質的に支配している現実や、忘れられる権利と知る権利の両立の難しさなどについて議論した。

秋学期には、まず江口清貴氏（LINE（株））が、LINEの成り立ちから始め、LINEの利用状況に関する調査を通して、安全なSNSの利用などについて講演した。また、SNSを利用する際、自分にとっての「当たり前」と、他人にとっての「当たり前」を意識することの重要性などに触れた。次に、上原哲太郎氏（立命館大学）は、マイナンバーの概要を紹介し、それに関わるリスクをプライバシーとセキュリティの観点から解説した。マイナンバーとマイナンバーカードの違いの認識、マイナンバーそのものが漏れた場合の被害などについて述べた。最後に、寺田真敏氏（（株）日立製作所）は、ウイルスなどによる攻撃方法の変遷および不正アクセスの基本について解説した。近年特に問題となっている例として、ソーシャルエンジニアリングに基づいた攻撃手法およびその対処の難しさについて述べた。

一部の講演は YouTube 上で公開されており、情報の教養学のホームページ（<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/>）から視聴できる。（高田真吾）

情報の教養学講演シリーズ 2016年度第1回
慶應義塾大学教養研究センター主催



メディアは世界を どう変えてきたか

池上彰

Akira Ikegami

4・19

会場変更のお知らせ

講演会の会場が
第6校舎 623
に変更となりました

講師：池上 彰（名城大学教授）

日時：4月19日（火）16:30～18:00

場所：日吉キャンパス 第6校舎 623

対象：塾生・教職員（無料）

問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

@Keio.learning

 <http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp>

情報の教養学講演シリーズ 2016年度第2回
慶應義塾大学教養研究センター主催

5・11

Kensaku Fukui

福井健策

大好評シリーズ 第2弾

パクリ炎上
ウェブ世論

デジタルネットワークの進展は、誰もが情報の発信者でありメディアとなる時代をもたらした。これまで一部の専門家のもだった著作権は国民の関心事へと変貌した。「五輪エンブレム」「TPP非関税化」などのキーワードから、著作権とウェブ世論の新たな緊張関係を読み解く。

講師：福井 健策（弁護士・日本大学芸術学部客員教授）

日時：5月11日（水）16:30～18:00

場所：日吉キャンパス来往倉1Fシンポジウムスペース

対象：塾生・教職員（無料）

問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

 <http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp>

 @Keio.learning



情報の教養学講演シリーズ 2016年度第3回
慶應義塾大学教養研究センター主催

デジタル時代の記憶と忘却

ERROR
Sorry, can't fully delete
OK TRY AGAIN

6月29日(水)
16:30~18:00

講師：生貝 直人
(東京大学大学院情報学環客員准教授)

場所：日吉キャンパス来客1F
シンポジウムスペース

対象：塾生・教職員 (無料・予約不要)

問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp

2016年度情報の教養学第4回講演会
慶應義塾大学教養研究センター主催

LINE

急速なネット化がもたらしたもの

LINEが考える情報モラルリテラシー啓発

10月5日(水)
16:30~18:00

講師：江口 清貴 (LINE株式会社)

場所：日吉キャンパス来客1F
シンポジウムスペース

対象：塾生・教職員 (無料 予約不要)

問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

2016年度情報の教養学第5回講演会
慶應義塾大学教養研究センター主催

マイナンバーの情報リスク

10月26日(水)
16:30~18:00

講師：上原 哲太郎
立命館大学情報理工学部情報システム学科学科教授

場所：日吉キャンパス来客1Fシンポジウムスペース

対象：塾生・教職員 (無料 予約不要)

問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp

2016年度情報の教養学第6回講演会
慶應義塾大学教養研究センター主催

セキュリティインシデントから学べること

11月9日(水)
16:30~18:00

講師：寺田 真敏
株式会社日立製作所横浜研究所
Hitachi Incident Response Team (HIRT)

場所：日吉キャンパス 第4校舎独立館D308

対象：塾生・教職員 (無料 予約不要)

問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

3 実験授業

3-1 庄内セミナー

第7回庄内セミナーは、例年通り、鶴岡市、鶴岡市教育委員会等の協力を仰ぎつつ、慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を拠点として、8月29日から9月1日までの3泊4日で催された。教養研究センター所長らが事前に鶴岡に赴いての関係者挨拶など、入念な準備を経てのことである。本年のテーマは「庄内に学ぶ〈生命（いのち）〉——心と体と頭と——」。参加者は学生27名、スタッフ8名（所長と副所長の全員を含む）。

本年度の開催期は台風10号の東日本への接近時期と重なっていた。台風は予報では勢力を保ちながら東北地方を縦断し、庄内平野を直撃する可能性が高く、大きな被害も予想されていた。セミナーの実施も危ぶまれた。が、初日の29日の交通にはまだ影響は少なく、現地に参加者が無事到達できるならば、たとえ台風が直撃したとしても、日程変更で対応しうるとの主催者判断によって、予定通り実施された。結果として、この判断は適切であった。庄内は29日深夜から強い風雨に見舞われ、台風は30日18時前に岩手県大船渡市付近に上陸。気象庁が観測データを持つ1951年以来で初めての東北地方太平洋岸に上陸した台風となり、北海道等に大きな被害を与えた。庄内も30日いっぱい悪天候であったけれど、そもそも30日のセミナーの行程に野外活動の予定はなく、移動のバスの運行が妨げられるほどのことはなかったので、当初の計画通りで問題は生じなかった。

セミナーは29日昼、参加者全員がTTCKに集合して始まり、そこから最終日までに11のセッションが実施された。①まずTTCK内にて学生を班分けし、班ごとにセミナー全体への目的意識・問題意識を高めるためのマインド・マップを作成。ついで旧庄内藩主酒井家の現当主で致道博物館館長、酒井忠久氏の講演「庄内の歴史と文化について」。鶴岡、酒田、出羽三山に関する概説がなされ、参加学生に対する恰好のイントロダクションとなった。②夜は宿泊先の休暇村羽黒で、庄内研究の泰斗、東山昭子氏の講演「庄内にまなぶ生と死」。話題は出羽三山の修験道、吉野弘の詩、藤沢周平の小説、東日本大震災など、多岐に及んだ。③30日午前中、湯殿山の注連寺で即身仏拝観。佐藤弘明住職の法話を伴った。住職は、江戸時代に即身仏となった鉄門海上人の事蹟、寺と作家の森敦や映画監督の本多猪四郎との縁を語った。昼食をはさんで、松ヶ岡開墾記念館

の見学も行った。④次に鶴岡市役所前の旧藩校致道館に赴き、致道館統括文化財保護指導員、富樫恒文氏のリードのもと『庄内論語』の素読体験。致道館の展示物も見学した。⑤それから、慶應義塾大学先端生命科学研究所に移動し、所長の富田勝氏から研究所の概要についての説明を受けたあと、所長自らの案内によって研究施設を見学した。⑥夜は引き続き宿泊先で富田氏の講演「生命はどのようにヒトに進化したのか、そして君は何のために生きているのか」。富田氏は講演を早めに切り上げて学生との車座での対話に多くの時間を割き、現代の学生のあるべき姿や今後の社会のありようについて論じられた。解散後も学生有志との対話は深夜にまで及んだ。⑦31日は朝より、いでは文化記念館の協力によって、羽黒山で修験体験。山伏修行体験塾の太田秀廣塾長の先導のもと、羽黒山登山、立谷沢川流域での滝打ち、そして最後に「南蛮いぶし」「火渡り」を行った。⑧夜は宿泊先で教養研究センター副所長、大出敦氏の講演「修験と古代人の魂観」。マルセル・モースのマナ観念によって修験道を説明しようとするものであった。⑨ついで深夜、出羽三山神社で、出羽三山の起源説話を核にした夏の夜祭、八朔祭を見学。帰りには星空観賞の時間も設けられた。⑩最終日の9月1日は、午前中にTTCKで班ごとに集合時に作成したマインド・マップを再整理しつつ、まとめを行い、その結果を全体に対して発表。⑪自由行動による市内観光。最後にTTCK内で鶴岡市企画部政策企画課長、永壽祥司氏の参加を得て懇親会を行い、つつがなく全日程を終えて、昼に現地解散した。

参加学生には9月末日までにレポートの提出を求め、それらを収録したセミナー報告書は12月25日付で発行された。

（片山杜秀）

庄内セミナーポスター



山伏体験 (滝打ちの行)



マインドマップ作成



講演 (富田勝氏)



関連図書展示



山伏体験 (羽黒山踏破)

II 教育開発関連プロジェクト

3 実験授業

3-2 日吉学

2016年度は縄文をテーマに探求・体感3回コースを実施した。10月22日第1回「触る！楽しむ！縄文ミュージアム」は安藤広道先生（文学部）と福田康史先生（木彫り土偶作家）が指南役となり、縄文を学ぶ意義を喚起する講義、学生のグループワーク、そして慶應義塾が誇る土器や土偶の優品に触れて考えるという贅沢な授業となった。縄文土器は軽量でしかもデザイン性が高く、受講生に縄文のイメージを覆す知的興奮を与えたようだ。

11月5日第2回「プロジェクション・マッピングで体験！縄文時代の日吉の地形と暮らし」では、まず太田弘先生（普通部）から出された課題に学生は取り組んだ。地名のない地形図に日吉の位置と海岸線を書き込む難問で、受講生は縄文時代の日吉の地形を想像しなければならない。藤森孝俊先生（普通部）による地形自然環境の講義の後、地形図アプリ入りのiPadやiPhone片手に、普通部通りを抜け、赤門坂の急坂を下り、上総層群王禅寺層の露頭（縄文期の汀線）へ。リアス海岸の痕跡に触れ、高低差を体感しつつ6000年前の縄文海進と現代の温暖化の未来図が交錯し像を結ぶ体験となった。教室では芝原暁彦先生（産業技術総合研究所地質調査所）をガイドとして、日吉と関東の地形とその形成をデジタル地図と3D模型を使ったプロジェクション・マッピングで擬似体験。

11月12日には第3回「日吉の森で縄文ランチ！ドングリクッキーは美味しいの？」と題して、縄文人の食文化を体験した。福山欣司・長沖暁子・持田浩治（経済学部）各先生の講義と手ほどきで、どろりやくるみを日吉の森で拾い、炙り、粉にし、焼き上げるまで普通部生から大学生、教員まで共に夢中になった。考古学編・地理編・自然編の2回以上の参加者に「日吉縄文人」認定証が授与され終了。アンケート結果では講義と体験と討論を組み合わせることによって理解が深まったという意見が多く寄

せられた。正規科目化に向けて、さらに2017年には準備を進める予定である。

（不破有理）

家とキャンパスの往復だけでは
飽き足りないそのホミミ!!
日吉の秘境を一緒に探検しませんか?

慶應義塾大学教養研究センター
2016年度 実験授業「日吉学」
探求・体感：縄文人の見た日吉

日吉に縄文？！いつものキャンパスに驚く層層が見える。
縄文の土器・土偶、数千年前の地形、縄文人の食。
過去の事柄から現代へのメッセージを読み解きます。

スケジュール 各回ともフィールドワーク・グループワーク、質疑、講義を予定しています

第1回 10.22 (土) 13:30～16:45 ◎独立第2期D206
「触る！楽しむ！縄文ミュージアム」

第2回 11.5 (土) 13:30～16:45 ◎独立第2期D206
「プロジェクション・マッピングで体験！縄文時代の日吉の地形と暮らし」

第3回 11.12 (土) 13:30～16:45 ◎第2校舎3期232 (生物実習室)
「日吉の森で縄文ランチ！ドングリクッキーは美味しいの？」

●対象： 学生（中・大一・大生、通信教育課程学生） ●参加費： 無料
●定員： 各回20名（第1回～第3回連日参加を希望します）
●申込締切： 第1回は10/19(水)、第2回は10/26(水)まで
早急に申し込み、お席を確保します

●備考： 雨天決行（欠天の場合、開催の有無を前日までご連絡します）
●問い合わせ先： toiwase-lib@adst.keio.ac.jp (慶應義塾大学教養研究センター事務局)
●ホームページ： <http://lib-arts.hk.keio.ac.jp/hiyoshi/> (「日吉学」で検索)

お申し込みは
「日吉学」HPから
QRコード

「日吉学」の特長は、他の授業では考えられない縄文と手法と手法が合体すること。受講生は慶應義塾の中学生から大学生までが共に探検、テーマを踏み、新鮮な発見をぶついたり、数珠連は各分野の専門家がずらり、そして慶應義塾が誇る優品に触れて考えることです。

2016年度は「縄文」。素材は縄文の土器や土偶、広大なキャンパス(リアス海岸)と地形を多角的視点から掘り縄文を体験します。指導先生は「事柄の観察」が学術の第一歩と「学習の目的」に設定されています。「日吉学」ではフィールドワークや観察を介して知識を主体的に構築することをめざしています。

第1回 10.22 (土) 13:30～16:45
「触る！楽しむ！縄文ミュージアム」
ガイド： 福田康史先生（木彫り土偶作家）・安藤広道先生（文学部）
慶應義塾は、古くから全課程各年代の縄文時代の遺跡を管理してきました。そのなかには、青森県の奥津波、三内山遺跡などの貴重な遺跡が数多くあります。今回は、これらの縄文時代の土器や土偶に触れ、語りつづける縄文を体験。1日限りの縄文博物館を開館します。遺物を手に取って、縄文人の感性、技術を感じてほしいと思います。その感性に魅せられた木彫り作家さんとコラボし、縄文の歴史に込められた縄文時代の暮らしを体験します。

第2回 11.5 (土) 13:30～16:45
「プロジェクション・マッピングで体験！縄文時代の日吉の地形と暮らし」
ガイド： 芝原暁彦先生（地質学）・藤森孝俊先生（普通部）・藤森孝俊先生（普通部）
「縄文時代、日吉人はどんな地形環境で暮らしていたのでしょうか？」こんな問いかけに答える講義です。縄文時代前期約6000年前は現在より年平均で1.2℃気温が高く、世界的にも完新世温暖期、後氷期温暖期と呼ばれ、青森の縄文はピークを築いたとされています。その頃の日吉は温暖になりリアス海岸になっており、現在の地形部分は写した。デジタル地図と3D模型を使ったプロジェクション・マッピングで、日吉や関東地域の地形とその形成のしくみを擬似体験します。

第3回 11.12 (土) 13:30～16:45
「日吉の森で縄文ランチ！ドングリクッキーは美味しいの？」
ガイド： 福山欣司先生（経済学部）・長沖暁子先生（経済学部）・持田浩治先生（経済学部）
秋になると、日吉の森では様々な果物の実がなります。日吉キャンパスには縄文時代人が住んでいたとされていますから、日吉の森でも縄文人が食べられた果物を採集していただきます。実は、縄文時代の遺跡からは、ドングリを煮た痕跡が見つかります。煮たドングリをどうやって食べていたのでしょうか。この授業では、日吉の森で採れたドングリを縄文人が行ったと想像される方法で調理し、試食したいと思います。煮たドングリをどうやって食べたのかを再現することと縄文時代の食文化の再現を再認識する機会にしたいと思っています。



4 「学び場」プロジェクト

アカデミック・スキルズを履修した学生が、そこで得たスキルを、自らの工夫を伴いながら、広く他の学生に伝達する。そのための「場」として、日吉メディアセンターと共同し、メディアセンターの1階に学習相談のカウンターを設け、そこにアカデミック・スキルズの既修者が学習相談員として座り、レポート作成や資料収集についての相談に応ずる。さらに学習相談員はカウンター業務のほかにも学生を対象とする種々の催事を開き、「大学生の学習法」についての啓蒙・啓発の役を務める。そのようにして、全国の大学でも類例の極めて少ない学部生が学部生を指導するかたちの範例を作り出してゆく。以上が「学び場プロジェクト」の本義であろう。しかし理想と現実には幾分の乖離がある。本義に則せば、授業と学習相談の仕事を両立させられる学部生で相談員の必要人数を充足することが望ましい。しかし実現には例年困難が伴い、結果として学部生時代にアカデミック・スキルズを履修した大学院生、ないしはアカデミック・スキルズを履修していないが同等の能力があると認められる大学院生に頼る傾向が強くなりがちである。本年度はその傾向が顕著に表れた。本年度の学習相談員16名の内訳は、博士課程4名、修士課程4名、法務研究科生1名、学部4年生2名、学部3年生3名、学部2年生2名。院生9名に対し学部生7名。しかも学習相談員の主たる仕事である、メディアセンターにおける平日午後1時から6時までのカウンター業務のレギュラー・メンバーは、春学期も秋学期も過半が院生。このような「院生依存体質」からの脱却が次年度以降の課題であろう。

本年度のカウンター業務は、春学期が4月25日～7月20日、秋学期が10月3日～1月20日に行われた。相談件数は、春学期が410件、うち3分以上の相談が66件。前年が372件だったので約1割増加。秋学期は234件、うち3分以上の相談が50件。前年が243件だったので、ほんの若干の減少。年間而言うと、学習相談実施日1日当たりの相談件数は約4.3件、同じく3分以上の相談件数は約0.9件。1日の実施時間は5時間であるから、1時間あたり1人来るか来ないかという勘定になる。相談内容で長時間を取るものには「入ゼミ・レポート」の作成についてなどがあり、30分以上に及ぶ事例は年間20件以上であった。

催事は以下の通り。春学期には「新入生歓迎トークイベント」(学習相談員4名登壇、参加者30名程

度)、レポートの書き方講座(同内容を2回、参加者は14名と11名)、プレゼンテーションの仕方の講座(同内容を2回、参加者は10名と7名)。秋学期には読書ノートの作り方講座(3回シリーズ、参加者は11名と20名と13名)、矢上のラーニングサポートと藤沢のライティング&リサーチコンサルタントとの共同開催による「キャンパス合同トークセッション」(日吉からは学習相談員3名が登壇、参加者はネット生中継等の視聴者を合わせて約40名)。(片山杜秀)

5 教員サポート

本年度の教員サポートは2017年1月18日、大岡真希子氏を講師として迎えておこなわれた。大岡氏は2008年以來、日吉、信濃町、三田の各キャンパスの学生相談室、ならびにストレスマネジメント室において学生、教員のカウンセリングを担当されている。講演は「学生相談室と共に考える学生対応」と題され、「学生相談室の概要」、「LGBTの学生支援」、「学生相談室と教職員との連携」という3つのトピックスが扱われた。

はじめに「学生相談室の概要」として、全塾に設置された学生相談室、ならびに同じ機能を果たす各種組織の紹介があった。なかでも、認知度が高いとはいえない信濃町のストレスマネジメント室の活動が報告された。カウンセラーの数、来談者数などの詳細なデータや、相談内容の事例が語られたほか、今後の課題として、学生相談室とストレスマネジメント室の連携が挙げられた。

続くテーマは「LGBTの学生支援」であった。性的マイノリティに対する社会的な取り組みが積極的におこなわれる一方、彼／彼女らの認知は未だ十分とはいえず、塾においても対応が遅れている。講演では、LGBTの明確な定義、セクシャリティの多様性、性的マイノリティの高い割合（全体の8%）が示されたあと、LGBTの学生が学生生活で抱える問題点について、その具体例（キャンパスにおけるトイレの問題から就職まで）と、教職員がとるべき対処法について説明がされた。また、事務窓口の改善、性的マイノリティについてのさらなる啓蒙の必要性が強調された。

最後に「学生相談室と教職員との連携」が組上にあげられた。過去の事例（ただし似たタイプの学生の問題をモザイク的に組み合わせたもの）を元に、カウンセラーが他の組織と連携しながらどのように問題を解決していったかが仔細に論じられた。とりわけ、よりよい問題解決のためには、さまざまな部署や周囲の人間の献身的な関わりが必要であり、学生の了解のもとで関係者が情報の共有をおこない、同じ方向性を持って支援を提供することが重要であると結ばれた。

講演後の質疑応答では、各部署の連携における学生への具体的な対応方法、LGBTを持つ学生への配慮、学習相談室への来談を拒むことが多いアジア系学生の問題について質問が出、そのおののけに対し回答、議論がおこなわれた。

大岡氏、ならびに日吉キャンパス学生相談室の中村麻里子氏、参加されたカウンセラーの方々のご尽力のおかげで多くの具体的データとアドバイスが提示され、きわめて有益な会であった。これは全塾教職員、とりわけ新任者の「必修科目」とすべき内容であったが、それに見合った参加者に恵まれなかったことが遺憾であった。ただし後日、資料をセンターに請求された教職員もおり、会期スケジュールへの更なる配慮が必要であると思われる。次回は新任教職員への呼びかけを強化するとともに、開催時期を移すことで多くの参加を促したいと考えている。

(新島 進)



1 日吉行事企画委員会 (HAPP)

日吉行事企画委員会 (HAPP) は、春学期は主に新入生歓迎行事、秋学期は公募企画行事を行っている。新入生歓迎行事は、HAPP が催し物を企画している。それぞれのイベントは、主として依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込むものである。その一方で、秋学期の公募企画では、塾生・教職員から企画を募集し、応募された企画の中から HAPP が、審査の形で選抜を行う。企画の募集は、新年度開始後行い、綿密な企画書を提出してもらった後、夏休み前までには、選考を終了する。主催者として HAPP は、①安全であること、②大学として行う価値のあるものを開催することの2点について常に留意している。

2016 年度の新入生歓迎行事としては、前年に続き、舞踏公演や各種講演会など、次の7つを主催した。① 2016 年 4 月 22 日「大野慶人舞踏公演」、② 2016 年 5 月 12 日講演会「物語の世界Ⅳ」(講師：亀山郁夫)、③ 2016 年 5 月 12 日・19 日・26 日、6 月 9 日「大学体育施設紹介と体力および体組成測定」、④ 2016 年 5 月 20 日・23 日・24 日「ライブラリーコンサート in 日吉～図書館がコンサートホールになる3日間～」、⑤ 2016 年 5 月 21 日「塾長と日吉の森を歩こう」、⑥ 2016 年 7 月 3 日「日吉音楽祭 2016 第 1 回演奏会」、および⑦ 9 月 24 日「日吉音楽祭 2016 第 2 回演奏会」。

2016 年度の公募企画は、次の1つであった。① 2016 年 12 月 2 日「島の思想と未来～日本の縮図を沖縄の「神の島」から考える～」と題された、『久高オデッセイ第三部風章』上映会と座談会であった。

企画を実施するにあたり、2011 年度に再改訂した以下の理念に基づき企画を実施した。新入生を中心に全学生を対象として、さまざまな企画を通じて多様な「知」の在り方を提示し、大学のみならず生涯にわたる「学習」の意味と可能性を考える機会を提供することを目指す。各種行事は「心と体と頭と」を総合テーマとし、(1) 知識・言語表現偏重型学習からの脱却、(2) 学生・教職員による一体型の活動の展開、(3) 地域・社会への大学・キャンパスの開放の3点を目標としている。

(石井 明)



亀山郁夫氏

新入生歓迎行事

LIBRARY CONCERT IN HIYOSHI

図書館がコンサートホールになる3日間

第1日 Classic	第2日 Blues	第3日 Jazz
2016年5月20日(金) ①15:00~15:30 ②17:00~17:30 日吉図書館1階ラウンジ	2016年5月23日(月) ①14:00~14:20 日吉図書館1階ラウンジ ②15:00~15:45 日吉図書館 地下1階 AVホール(学内限定)	2016年5月24日(火) ①13:30~14:00 日吉図書館1階ラウンジ ②17:00~17:50 日吉図書館 地下1階 AVホール(学内限定)
コレリ (ラ・フォリア) エルガー 《愛の挨拶》 モンテ 《チャルダッシュ》 ほか	Always On My Mind TENDERNESS You Raise Me Up ほか	Ornithology / Charlie Parker Alone Together / Arthur Schwartz ほか
演奏：本庄篤子 (ヴァイオリン) 横山歩 (ピアノ)	演奏：水上寿美江 (ヴァイオリン) ichiro (ヴォーカル&ギター) 土田晴信 (オルガン&ピアノ)	演奏：井上智 (ギター) 金子健 (ベース)

主催：慶應義塾大学教養研究センター・日吉行事企画委員会 (HAPP)、日吉メディアセンター 予約不要・入場無料



5月20日(金)

10月29日

3時限 「銀河系の辺縁から中心を見る」

岡 朋治（理工学部教授）

4時限 「リハビリテーションの中央と地方」

富田 豊（慶應義塾大学名誉教授）

11月5日

3時限 「『風景』の発見と『観光旅行』の始まり」

坂本 光（文学部教授）

4時限 「デジタル地域通貨と『地方』のエンパワーメント」

齊藤賢爾（一般社団法人アカデミーキャン
プ代表理事・慶應義塾大学 SFC 研究所上
席所員）

11月12日

3時限 「地方からスペインを多元化する——カタ
ルーニャの独立問題をめぐって」

八嶋由香利（経済学部教授）

4時限 「オペラと地域文化振興」

石井 明（経済学部教授）

11月26日

3時限 「滞在型市民農園「クラインガルテン」の
可能性——日欧比較から見えるもの」

小林拓也（理工学部専任講師）

4時限 「World citizens take the power——霧の向こう
*yonaoshi 3.11」

ケイコ・クルディ（映画監督）

12月3日

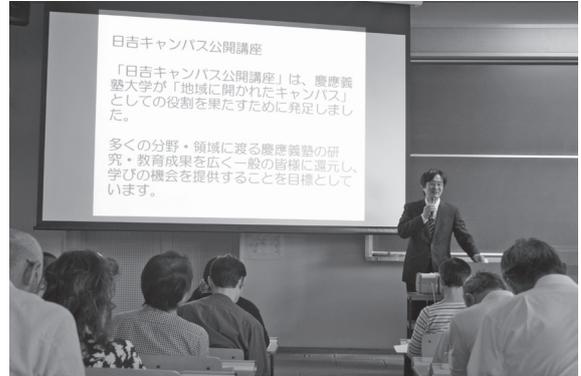
3時限 「地域格差とその再生」

金子 勝（経済学部教授）

4時限 「『地方』の自治と民主主義の実践」

片山善博（法学部教授）

(小菅隼人)



講座初日（小菅隼人所長）



小林拓也氏



金子勝氏



片山善博氏

3 寿拠点「カドベヤ」

2016年6月で教養研究センターの地域交流拠点として使っているカドベヤは開所満6年目を迎えた。本年度も毎週火曜日に以下の二つの活動を展開した。1) 足湯カフェ:17時半～19時 2) ストレッチと夕めし:19時～21時(19時～20時が「ストレッチ」、20時から21時が「夕めし」)である。

ワークショップを提供する「ストレッチ」の場では、コンテンポラリーダンサーや表現アーティストが「案内人」となり、身体を通して対自・対他できるコンテンツを提供している。同時に参加者自身がワークショップの案内人をつとめるようになって、今年で3年目になる。

本年度はこのような活動を総括する意味で、①「コミュニティ」と「コミュニティにおけるアート」の意義と可能性を探ること、そして②今までの活動を総括する成果発表、の二つを目標とした。

①に関しては、「コミュニティを知る」という名のもとに4回のティーチ・イン、およびワークショップを開催した。具体的には「コミュニティを形成する人々を知る」、「コミュニティについて語り、書く」、そして「コミュニティとアートの関係について知る」の3つを中心に4回のティーチ・イン(そのうち1回はワークショップ)を開催した。同時にふだんのワークショップの中でも「語り合い」と「居場所」について考察する時間を「ストレッチ」の時間に積極的に設けることで、毎週この居場所に参加している人の声を聴くと同時に居場所づくりの方法も探った。

その意味で第一の目標は達成できたとの実感がある。残念ながら②の目標である「成果発表」に向けての活動では、今までのワークショップを踏まえてのコミュニティアート・イベントを開催する予定だったが、当初の企画通りに進められなかった。教養研究センターでは、「身体知」教育の立ち上げに加わり、「カドベヤ」の運営協力アーティストでもあった黒沢美香氏の演出で、2011年5月11日にアート・イベントを慶應で学生参加者とともに開催し、「カドベヤ」の活動を紹介し、居場所の意義を広く発信した。本年度も同氏を中心にこれまでのカドベヤの活動を踏まえ、新たなコミュニティアート・イベントを企画していた。しかし、黒沢氏を12月に病気で失いフォロー体制を打ち立てることができなかったために成果発表会としてのイベントは行うことができなかった。しかし、現在の運営委員会メン

バーで新たに学生も参加する形での成果発表会に向けてすでに話し合いを進めている(2018年1月に開催予定)。

また本年度の大きな特徴は、近隣以外の外部からの毎回の参加者、および定期的に参加してくれる案内人の協力が増えたことであろう。案内人のアーティストの中にも毎回参加者として来てくれる方もおり、運営側としても「居場所」の意義を感じる1年であった。

(前野隆司)

ティーチ・イン「コミュニティを考える」1
心をやまいと共に生きること

私たちはみな一人ひとり違う。背が高かったり低かったり、歌がうまかったり下手だったり。神経質だったり、大胆だったり。違いがあるから一緒に生きていくの楽しい。違いがあるからぶつかって、新しい世界が見えてくる。「共に生きていく」ことを考えるティーチ・インの第1回は「心をやまいと共に生きること」について、当事者からお話をうかがいます。

●スピーカー: 海東宏二(かいとうこうじ)

1975年慶應高校卒業、その後慶應義塾大学理工学部に進学するも、大学2年次に統合失調症を発病、てんかんの発作も起こすようになり、休学、入退院を繰り返したのち1982年に大学を中退。40代まで様々な会社で働くが、いずれも病気のために退職。その後、クリニックに通いながらケア、地域活動支援センターなどで活動を開始する。2013年には放送大学を卒業し、今年、日本福祉教育専門学校で通信教育課程を修了。当事者としてピアカウンセラーを目指す。

聞き手: 横山千晶(よこやまちあき) 法学部教授

●日時: 2016年12月6日(火)19:00-20:00

ティーチ・インは地域連携事業・居場所「カドベヤで過ごす火曜日」とのタイアップで行われます。20時以降夕食への参加を希望される方は500円が必要ですので申し込みは当日で構いません。

●場所: 居場所「カドベヤ」(横浜市中区石川町5-209-3 1階)

予約は限りませんが会場がそれほど広くないため満員の時は入場をお断りする場合もあります。あらかじめご了承ください。

●問い合わせ先: 横山千晶 chacky@keio.jp

主催 慶應義塾大学教養研究センター
居場所「カドベヤ」運営委員会
助成 横浜市地域文化サポート事業「ヨコハマアートサイト2016」

ヨコハマアートサイト



4 神奈川県ヘルスケア・ ニューフロンティア講座

慶應義塾大学教養センターは、神奈川県からの委託事業として、2015年度に続いて以下の基本理念のもとで「ヘルスケア・ニューフロンティア講座」に取り組んだ。但し、「文化としての病と老い」というテーマのうち、2016年度は「老い」に重点をおいて活動を展開した。2016年度の展開においても、当センターは、「老い」を忌避すべきものとは考えず、その価値を積極的に評価することも視野に入れ、「老い」と「病」に対する一般のイメージを一旦白紙に戻して考究した。神奈川県に提案した基本理念は以下のとおりである。

基本理念

私たちの生命は、生まれた瞬間から、死に向かう旅路を歩み始めます。その成長から衰弱への過程の中で、私たちの身体は、病気、健康、幼年、若年、壮年と呼んでいる様々な状態のなかで揺れ動きますが、やがて来るべき生命の衰弱体としての「老い」の向こうには、「一度境を越えたものは二度と戻れぬ未知の世界」(『ハムレット』)である「死」が広がっています。一人の例外も許さないこの存在の必然に向き合い、私たちは不可逆的に死に近づいてゆく時の流れに「恐れと慄き」を感じ、そこに向かって病み朽ち果てていく肉体の衰えと醜さを嫌悪し、嘆き、そして絶望しつつ、必死にそれに抗おうとします。しかし、一方、「病」と「老い」は、時や記憶や死をも織り込んだ肉体としての「重みと痛み」を実現します。私たちは、そこに、「命がけて突っ立っている死体」(土方巽)としての生命のあり方を実感し、究極の美と聖性を見出します。生命は、誕生、成長、病気、衰弱、死の全てを包含するが故に美しく尊いものであると言えます。そうであれば、私たちは、「病」と「老い」が忌むべきもの、避けるべきもの、克服すべきものという「思い込み」にひとたび疑問符を付け、白紙の状態で「病」と「老い」を考え直さなければいけません。もしかすると、病や老いは私たちにとって生きている証であり、恵みかもしれないからです。また、本当に健康の有難さ、重要性を実感するためには、やみくもに老いや病を恐れるのではなく、その意味を正負の両面から考える必要があります。

そのような前提に立って、当センターはヘルス

ケア・ニューフロンティア講座「文化としての病と老い」というテーマを掲げ、研究を始めます。これは、私たちが病と老いに正面から向き合い、私たちが生きる意味を教養の力で明らかにしようとするプロジェクトです。学生、一般から広く参加者を募り、公開講義の設置、ワークショップの実施、研究会の設置という多様な方法を取り、様々な側面から議論を深めていきます。参加者にとって本講座は「病」と「老い」に向き合い、「生きることの意味」「生きることの価値」を見つめなおす機会となると考えています。

大学の立場からのヘルスケア・ニューフロンティア 構想の位置付け

2015年度からはじめたこのプロジェクトにおいて、2016年度は、神奈川県のメディカル・イノベーションスクール設立構想を念頭に置いて、人材育成という点から、大学におけるヘルスケア・ニューフロンティア構想の教育的位置付けについて、その考え方を明確化した。すなわち、ヘルスケア分野においては、総合的なバランスのとれた人材育成が必須であると当センターは考え神奈川県に提案しつつ、その視点からも研究活動を行った。清家塾長の所信

神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 文化としての病と老い

神奈川県は、超高齢社会を乗り越えるため「ヘルスケア・ニューフロンティア」の展開に取り組んでおり、これら人材を育成するため「メディカル・イノベーションスクール」の設置を目指しています。慶應義塾大学教養センターは、こうした取組みを踏まえて「文化としての病と老い」というテーマを掲げ、2016年度は「老い」に重点を置いて公開講義とワークショップを開催します。

	2016年度開催要項	募集要項
10/12 (水)	16:30~18:00 超高齢社会を生きるーヘルスとウェル・ビーイング 高山 緑 慶應義塾大学 理工学部教授	募集対象 慶應義塾大学生・大学院生、一般 会場 慶應義塾大学 日吉キャンパス内 受講料 無料
10/24 (月)	16:30~18:00 文化の中の認知症ー日本の文学・文化作品を通して考える 迫 桂 慶應義塾大学 経済学部准教授	発行期間 2016年7月25日(月)~9月23日(金)
10/29 (土)	13:00~15:30 高齢者の生活環境を考えるー疑似体験をとおしてー 板垣悦子 慶應義塾大学 体育研究部准教授	申込方法 教養研究センターWebページのお申し込み フォームからお申し込みください。
11/16 (水)	16:30~18:00 サクセスフルエイジングとメンタルヘルス 三村 将 慶應義塾大学 医学部精神・神経科学教室教授	募集定員 講義 各回250名 ※1 10/29ワークショップ40名 ※2 11/26ワークショップ100名 ※1 ※1 定員超過の場合は抽選となります。 ※2 定員超過の場合は抽選となります。
11/26 (土)	13:00~16:15 映画「楳栗節考」(木下重介監督)を見て老いを考える 片山杜秀 慶應義塾大学 法学部教授	期間 2016年7月25日(月)~9月23日(金)
12/15 (木)	16:30~18:00 口腔の健康を長く保つ 池田 通 長崎大学 大学院歯医学部総合研究科口腔病理学分野教授	申込方法 教養研究センターWebページのお申し込み フォームからお申し込みください。
12/15 (木)	16:30~18:00 口腔の健康を長く保つ 池田 通 長崎大学 大学院歯医学部総合研究科口腔病理学分野教授	募集要項 講義・ワークショップとも1回からの申し込み が可能です。 複数回のお申し込みも歓迎いたします。
12/15 (木)	16:30~18:00 口腔の健康を長く保つ 池田 通 長崎大学 大学院歯医学部総合研究科口腔病理学分野教授	ヘルスケア・ニューフロンティア 「最先端医療・最先技術の遊歩」と「未来の 医療」というアプローチを統合すること により、健康寿命を延ばすとともに、新たな社会 場・産業を創出し、誰もが健康で生き生きと できる社会を目指す神奈川県のプロジェクト
12/15 (木)	16:30~18:00 口腔の健康を長く保つ 池田 通 長崎大学 大学院歯医学部総合研究科口腔病理学分野教授	メディカル・イノベーションスクール ヘルスケア・ニューフロンティアを目指す国際 的な医療人材を育成する教育機関

お問い合わせ
慶應義塾大学教養センター 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 事務局
Tel:045-563-3978 (日本語でのお問い合わせは土日祝日を除く9時~17時)
Email: hnc2016@adsc.keio.ac.jp

URL: <http://libarts.hc.keio.ac.jp/>
教養研究センター | 検索

にもあるとおり（2016年1月10日、「第181回福澤先生誕生記念会年頭の挨拶」、慶應義塾大学は(1) 学問の発展、(2) 教養教育、(3) 高度専門職教育、(4) 健全な学生生活の四つのバランスを重視し、そのどれも疎かにされてはならないと考えている。とりわけ、人命を直接扱うメディカル・イノベーションスクールには、そのバランスは非常に重要であり、さらに教養を研究する当センターとしては、このバランスにおける教養の役割について大きな関心を持った。ヘルスケアに携わるものは、教養を土台にして、生命や人間に対する揺るぎない基本認識を持たなければならないし、それなくしては、いくら高度な技術を身に付けようと有効に活かされることはないからである。日本における2014年度の警察庁発表の自殺者は年間24,025人、そのうち「60歳代」は3,973人（16.5%）、「70歳代」は3,451人（14.4%）であり、また、内閣府自殺対策推進室は、「原因・動機が明らかなもののうち、その原因・動機が〈健康問題〉にあるものが12,145人で最も多〔い〕」としている。この統計は、病気を治す、老衰を止めるという狭い意味での医療の問題を超えて、豊かな精神の涵養こそが生死の問題となっていることを示している。そうだからこそ、ヘルスケア分野においては人間の内面をも視野に入れ、また、それについてしっかりと考えることができる人材育成を総合的な視点から目指すべきと考え、公開講座と研究活動に取り組んだ。

今後の展望

本講座は、2016年度も一般を対象とした公開講座、研究者個別のテーマによる研究活動、そして研究者と大学院生を主たる対象とした研究ワークショップで構成された。そのうち、研究ワークショップを設計した鈴木見仁教授は、ワークショップ開催に際して、当センターとメディカル・イノベーション構想の関係を見事に纏めてくれた。すなわち、

…21世紀に英語圏を中心にして顕著になった新しい学問である Medical Humanities（医療人文学）は、もし慶應の図柄に合わせて掲げるとしたら、日吉キャンパスと教養研究センターの学問になることでしょう。この学問は、もちろん多様な主題と方法を持っていますが、人文系の学問を基盤にして、医療における患者の文化的な構成や、医療行政の基礎にある人々の文化と生活を明らかにし

ていくことが中心にあります。医学史、医療人類学、医療社会学、医療と文学、医療と芸術などの、さまざまな学際的な学問を出発点にして、文化と社会における医学・疾病・身体を問い直してみる作業です。まさに、日吉キャンパスのような性格の学問と教育の集合体にふさわしい領域です。（2017年2月9日、慶應義塾大学日吉キャンパス、研究ワークショップ配布プログラムより）

2年間にわたるヘルスケア・ニューフロンティア構想への取り組みにおいて、当センターは、医療について今後取り組むべき学問分野の開拓において明確な方向性を得られたと考えている。そして、今後、医療あるいはさらに広く「生命」を中心とした人文学の研究に精力的に取り組んでいく所存である。

最後にこのプロジェクトにご協力いただいた慶應義塾内外の研究者の方々、事務作業を支えてくださったの方々、そして、この機会を与えてくださった、神奈川県および神奈川県政策局ヘルスケア・ニューフロンティア推進本部室のみなさまに御礼を申し上げます。とりわけ神奈川県庁の国際的医療人材グループの方々、公開講座・ワークショップ共に、毎回日吉キャンパスに足を運び、最後まで企画を見守ってくださり、また、意見・助言をいただいた。当センターとして大いに励みになったことを申し添えておきたい。

（小菅隼人）



高山緑氏（10月12日）



歩行等体験 (10月29日)



ワークショップ (11月26日)



池田通氏 (12月15日)

**神奈川県
ヘルスケア・
ニューフロンティア
ワークショップ**

文化としての病と老い

2017年2月9日(木) 9:00-17:30
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2階中会議室
入場無料・予約不要

9:00-10:00 鈴木 昇仁 (慶應義塾大学教授)
 ◆医療人文学の進展と新しい医療文化

10:15-11:15 渡部 沙織 (日本学術振興会特別研究員)
 ◆時代の精神医療と社会学的課題
 歴史分析からジェネティック・リテラシーへ

11:30-12:30 Shi Lin Loh (慶應義塾大学准助研究員)
 ◆ヒーリング・アフォーラ、医療人第一応答者 (ファーストレスポnder) の
 視点から「専門家」を再考する

12:30-13:45 お藤林 徳
 坂本 葵 (作家)
 ◆医療小説としての谷崎潤一郎『鍵』『真珠老人日記』

13:45-14:45 小川 公代 (上智大学教授)
 ◆「苦痛」を語ること—英文学の具体的な事例から

16:15-17:15 和田 恵美子 (京都学園大学准教授)
 ◆病気の体験を書くこと、読むこと、それを語ること
 —医療者の立場から、病いを語る医療者の姿を通して

17:15-17:30 総括

主催：神奈川県・慶應義塾大学教養研究センター 問合せ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

1 慶應義塾大学教養研究センター規程

平成14年7月2日制定

改正 平成17年6月3日 平成18年5月9日
平成20年5月1日 平成20年11月4日
平成21年12月15日 平成23年3月29日
平成26年12月5日

(設置)

第1条 慶應義塾大学(以下「大学」という。)に、慶應義塾大学教養研究センター(Keio Research Center for the Liberal Arts。以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進することで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 教養研究活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 3 教養研究活動への助成および支援
- 4 教養研究活動状況の把握と情報の収集および発信
- 5 その他センターの目的達成のために必要な事業

(組織)

第4条 ① センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
 - 2 副所長 若干名
 - 3 所員 若干名
 - 4 研究員 若干名
 - 5 事務長
 - 6 職員 若干名
- ② 所長は、センターを代表し、その業務を統括する。
- ③ 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。
- ④ 所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。
- ⑤ 研究員は、特任教員、研究員(有期)または兼任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

⑥ 国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。

⑦ 事務長は、センターの事務を統括する。

⑧ 職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。(運営委員会)

第5条 ① センターに運営委員会を置く。

② 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉ITC所長
- 9 体育研究所長
- 10 外国語教育研究センター所長
- 11 自然科学研究教育センター所長
- 12 日吉キャンパス事務長
- 13 その他所長が必要と認めたる者

③ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

④ 運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

⑤ 運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
 - 2 センターの事業計画に関する事項
 - 3 研究プログラムに関する事項
 - 4 人事に関する事項
 - 5 予算・決算に関する事項
 - 6 コーディネート・オフィスに関する事項
 - 7 その他必要と認める事項
- (コーディネート・オフィス)

第6条 ① センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するために、運営委員会の下にコーディネート・オフィスを置く。

② コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。コーディネーターは、所長、副所長、事務長とともに、センターの事業を推進する。

③ コーディネート・オフィスは、必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託す

ることができる。

(特別委員会)

第7条 運営委員会は、必要に応じて特別委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

(教職員の任免)

第8条 ① センターの教職員等の任免は、次の各号による。

1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。

2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。

3 特任教員および研究員(有期)については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

4 訪問研究者については、「訪問学者に対する職位規程(昭和51年8月27日制定)」の定めるところによる。

5 事務長および職員については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

6 コーディネーターは、所員および義塾職員の中から、所長が推薦し、運営委員会が委嘱する。

② 所長、副所長およびコーディネーターの任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

③ 所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

④ 兼任研究員の任期は、次条に定める研究プログラムの研究期間とする。

(研究プログラム)

第9条 ① センターに次の研究プログラムを置く。

1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究

2 一般研究：センターが必要と認めた個人研究または共同研究

3 特定研究：センターが企画、立案した研究

② 研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

(契約)

第10条 ① 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

② 学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

(経理)

第11条 ① センターの経理は、「慶應義塾経理規程(昭和46年2月15日制定)」の定めるところによる。

② センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

③ 外部資金の取扱い等については、学術研究支援部の定めるところによる。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附 則

① この規程は、平成14年7月1日から施行する。

② この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

附 則(平成17年6月3日)

この規程は、平成17年6月3日から施行する。

附 則(平成18年5月9日)

この規程は、平成18年5月9日から施行し、平成18年5月1日から適用する。

附 則(平成20年5月1日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成20年11月4日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成21年12月15日)

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則(平成23年3月29日)

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則(平成26年12月5日)

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

2 運営委員会委員

2016年4月1日～2017年3月31日在籍者
第8期(2015年10月1日～2017年9月30日)

教養研究センター担当常任理事

長谷山 彰

教養研究センター所長

小菅 隼人

教養研究センター副所長

片山 杜秀

大出 敦(2016年9月30日まで)

工藤多香子(2016年9月30日まで)

高橋 宣也(2016年10月1日から)

新島 進(2016年10月1日から)

教養研究センター事務長

吉川 智江

文学部長 松浦 良充

経済学部長 中村 慎助

法学部長 岩谷 十郎

商学部長 榊原 研互

医学部長 岡野 栄之

理工学部長 青山藤詞郎

総合政策学部長 河添 健

環境情報学部長 村井 純

看護医療学部長 小松 浩子

薬学部長 杉本 芳一

文学部日吉主任 坂本 光

経済学部日吉主任 境 一三

法学部日吉主任 下村 裕

商学部日吉主任 種村 和史

医学部日吉主任 南 就将

理工学部日吉主任 萩原 眞一

薬学部日吉主任 阿部 芳廣

体育研究所所長 石手 靖

日吉メディアセンター所長

齋藤 太郎

外国語教育研究センター所長

七字 眞明

自然科学研究教育センター所長

金子 洋之

日吉研究室運営委員会委員長

朝吹 亮二

日吉キャンパス事務長

栗谷 文治

日吉学生部事務長

黒田 修生

日吉メディアセンター事務長

市古みどり(2016年10月31日まで)

長島 敏樹(2016年11月1日から)

日吉キャンパス事務センター課長

今村江里子

基盤研究(社会・地域連携)代表

羽田 功

日吉行事企画委員会(HAPP)委員長

石井 明

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

山下 一夫

3 組織構成員

2016年4月1日～2017年3月31日

所員：203名（2017年3月31日現在）

所長：小菅隼人(理)

副所長：片山杜秀(法)

大出 敦(法・2016年9月30日まで)

工藤多香子(経・2016年9月30日まで)

高橋宣也(文・2016年10月1日から)

新島 進(経・2016年10月1日から)

コーディネーター：

下村 裕(法)、武藤浩史(法)、種村和史(商)、

赤江雄一(文)、羽田 功(経)、高山 緑(理)、

鈴木晃仁(経)、不破有理(経)、徳永聡子(文)、

前野隆司(SDM研究科)、高田眞吾(理)、

石井 明(経)、山下一夫(理)、

栗谷文治(キャンパス事務長)、吉川智江(教セ事務長)

広報担当：工藤多香子(経・2016年9月30日まで)

高橋宣也(文・2016年10月1日から)

日吉行事企画委員会(HAPP)

委員長：石井 明(経)

委員：高橋宣也(文)、大出 敦(法)、佐藤 望(商)、

竹内美佳子(商)、津田眞弓(経)、小菅隼人(理)、

小宮 繁(理)、森 泉(理)、杉山由希子(理)、

石手 靖(体研)、徳村光昭(保セ)、

栗谷文治(キャンパス事務長)、

今村江里子(運営サ)、澤藤正哉(運営サ)、

篠塚憲一(学生部)、

山崎健二(学生部・2016年5月31日まで)、

服部剛久(学生部・2016年5月31日まで)、

秋山 慧(学生部・2016年6月1日から)、

市古みどり(日吉メディアセ・2016年10月31日まで)、

長島敏樹(日吉メディアセ・2016年11月1日から)、

酒見佳世(日吉メディアセ)、鈴木都美子(教養セ)、

高橋 剛(社会・地域連携室・2016年5月31日まで)、

小澤健策(社会・地域連携室・2016年6月1日から)

極東証券寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人(理)

委員：片山杜秀(法)、

大出 敦(法・2016年9月30日まで)、

工藤多香子(経・2016年9月30日まで)、

高橋宣也(文・2016年10月1日から)、

新島 進(経・2016年10月1日から)

「生命の教養学」企画委員

委員長：赤江雄一(文)

委員：山下一夫(理)、高桑和巳(理)、鈴木晃仁(経)、

小野裕剛(法)、

小瀬村誠治(法・2016年9月30日まで)、

板垣悦子(体育研究所・2016年9月30日まで)、

村松憲(体育研究所・2016年10月1日から)、

佐藤聖(慶大出版会・2016年9月30日まで)、

吉川智江(教セ事務長)

住友生命保険寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人(理)

委員：片山杜秀(法)、

大出 敦(法・2016年9月30日まで)、

工藤多香子(経・2016年9月30日まで)、

高橋宣也(文・2016年10月1日から)、

新島 進(経・2016年10月1日から)、

石井 明(経)

龍角散寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人(理)

委員：片山杜秀(法)、

大出 敦(法・2016年9月30日まで)、

工藤多香子(経・2016年9月30日まで)、

高橋宣也(文・2016年10月1日から)、

新島 進(経・2016年10月1日から)、

石井 明(経)

日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：山下一夫(理)

委員：小菅隼人(理)、石井 明(経)、福澤利彦(商)、

寺沢和洋(医)、前野隆司(SDM研究科)、

佐々木玲子(体研)、

大出 敦(法・2016年9月30日まで)、

高橋宣也(文・2016年10月1日から)、

島田美和(法・2016年10月1日から)

神奈川県公開講座運営委員会

小菅隼人(理)、片山杜秀(法)、

大出 敦(法・2016年9月30日まで)、

工藤多香子(経・2016年9月30日まで)、
高橋宣也(文・2016年10月1日から)、
新島 進(経・2016年10月1日から)、
井奥洪二(経)、鈴木晃仁(経)、高山緑(理)、
林田愛(経)

2016年度庄内セミナースタッフ

小菅隼人(理)、片山杜秀(法)、大出 敦(法)、
工藤多香子(経)、ガボリオ、マリ(経)

2017年度庄内セミナー実行委員会(2016年11月16日から)

委員長：大出 敦(法)

委員：小菅隼人(理)、高橋宣也(文)、工藤多香子(経)、
伏見岳志(商)、中川真知子(経)

日吉学検討委員会(2016年6月1日から)

代表：不破有理(経)

委員：小菅隼人(理)、片山杜秀(法)、
大出 敦(法・2016年9月30日まで)、
工藤多香子(経・2016年9月30日まで)、
高橋宣也(文・2016年10月1日から)、
新島 進(経・2016年10月1日から)、
福山欣司(経)、長沖暁子(経)、
神武直彦(SDM研究科)、
都倉武之(福澤研究セ)、阿久沢武史(塾高)、
太田 弘(普通部)

日吉学運営委員会(2016年11月16日から)

小菅隼人(理)、片山杜秀(法)、高橋宣也(文)、
新島 進(経)、不破有理(経)

日吉学企画委員会(2016年11月16日から)

委員長：不破有理(経)

委員：小菅隼人(理)、片山杜秀(法)、高橋宣也(文)、
福山欣司(経)、長沖暁子(経)、大出 敦(法)、
神武直彦(SDM研究科)、
都倉武之(福澤研究セ)、阿久沢武史(塾高)、
太田 弘(普通部)

教養研究センター事務局

吉川智江(事務長)、鈴木都美子、池本晶子、
傳 小史、鬮目優子(2017年1月31日まで)、
大澤 綾(2017年2月1日から)

4 2016年度の主な活動記録

Date	Events
4	5日 教養研究センター設置科目全体ガイダンス 7～13日 クラス別ガイダンス 15日 第1回所長・副所長会議 19日 第1回情報の教養学「メディアは世界をどう変えてきたか」 22日 HAPP企画「新入生歓迎行事：大野慶人舞踏公演—舞踏という生き方」 25日 学習相談 新入生歓迎トークイベント「YOUは何しに慶應へ？—大学での学びと過ごし方—」 27日 読書会推進企画「晴読雨読」第一弾
5	11日 第2回情報の教養学「バクテリアとウェブ世論」 11日 学会・ワークショップ等開催支援 クリスチャン・フェゲルソン講演会《Filming Paris?》 12日 HAPP企画「新入生歓迎講演会：物語の世界IV」 12、19、26日、6/9 HAPP企画「新入生歓迎：大学体育施設紹介と体力および体組成測定」 16日 ニュースレター 28号刊行 20日 第2回所長・副所長会議 20、23、24日 HAPP企画「新入生歓迎行事：ライブラリーコンサート in 日吉」 21日 HAPP企画「塾長と日吉の森を歩こう」 21日 学会・ワークショップ等開催支援 D. A. ミラー講演会「隠されたヒッチコック」 25日 第1回コーディネート・オフィス会議
6	1日 第十六弾「研究の現場から」荒木文果、大野真澄 3日 読書会推進企画「晴読雨読」第二弾 8日 庄内セミナー募集説明会 16日 学会・ワークショップ等開催支援 アメリカ研究ワークショップ 22、24日 学習相談 レポート・プレゼン講座 24日 第3回所長・副所長会議 28日～7/26 学習相談展示「レボ松さん～脱・お粗末レボのWord術～」 29日 第3回情報の教養学「グーグルと国家 デジタル時代の記憶と忘却」 29日 読書会推進企画「晴読雨読」第三弾
7	3日 HAPP企画「新入生歓迎行事：日吉音楽祭 2016」 5日 学会・ワークショップ等開催支援 Tagu Films ミャンマーの素顔：ミャンマー映画上映会 9日 学会・ワークショップ等開催支援 日本エミリオ・ディキンソン学会第31回大会
8	1日 第4回所長・副所長会議 1日 学習相談春学期反省会 3日 第2回コーディネート・オフィス会議 3日 庄内セミナー参加者事前説明会 3日 読書会推進企画「晴読雨読」第四弾 29日～9/1 第7回庄内セミナー 31日 2015年度活動報告書刊行
9	8日 第1回運営委員会 10、11日 学会・ワークショップ等開催支援 Morphology and Lexicon Forum 2016（形態論・レキシコンフォーラム） 24日 HAPP企画「新入生歓迎行事：日吉音楽祭 2016」 30日 第5回所長・副所長会議
10	1日～12/3 日吉キャンパス公開講座「地方の力と「再生」」＜全8回16コマ＞ 5日 読書会推進企画「晴読雨読」第五弾 5日 第4回情報の教養学「急速なネット化がもたらしたもの—LINEが考える情報モラル／リテラシー啓発—」 12日 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 講義①「超高齢社会を生きる—ヘルスとウェルビーイング」 19日 第十七弾「研究の現場から」中川 真知子、沼尾 恵 22日 第1回実験授業 日吉学「触る！楽しむ！縄文ミュージアム」 24日 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 講義②「文化の中の認知症—日本の文学・文化作品を通して考える」 25日 学会・ワークショップ等開催支援 ミレイユ・ユション氏講演会＋荻野アンナ氏対談「ラブレールを讀もう！—フランス・ルネサンス文学入門—」 26日 第5回情報の教養学「マイナンバーの情報リスク」 27日 学びの連携プロジェクト第1回公開セミナー「効果的な論文指導を目指して—日本語論文編」 28日 第6回所長・副所長会議 29日 神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 WS①「高齢者の生活環境を考える—疑似体験をとおして—」

Date	Events
5日	第2回実験授業 日吉学「プロジェクト・マッピングで体験！縄文時代の日吉の地形と暮らし」
9日	第6回情報の教養学「セキュリティインシデントから学べること」
9日	読書会推進企画「晴読雨読」第六弾
12日	第3回実験授業 日吉学「日吉の森で縄文ランチ！ドングリクッキーは美味しいの？」
16日	第3回コーディネート・オフィス会議
11 16日	神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 講義③「サクセスフルエイジングとメンタルヘルス」
25日	第7回所長・副所長会議
26日	神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 WS②「映画『檀山節考』（木下恵介監督）を見て老いを考える」
26日	HRP2016（日吉学展示／神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 WS）
30日	ニューズレター 29号発行
2日	HAPP 企画「島の思想と未来—日本の縮図を沖縄の「神の島」から考える—『久高オデッセイ第3部風章』上映とトーク」
2、9、16日	学習相談 講座「レポートで役立つ！～読書ノートの作り方講座～」
6日	カドベヤ ティーチ・イン「コミュニティを考える」1 心のやまいと共に生きること
14日	第十八弾「研究の現場から」新島進、中谷彩一郎
14日～2/2	学習相談 展示「教えて、ぴあくろう！」
11 15日	学習相談「3キャンパス合同トークセッション—決めるはムズいが役に立つ 自分らしい大学生活のための決断とは！？—」
15日	神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座 講義④「口腔の健康を長く保つ」
18、23、25日	慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・オペラプロジェクト2016《ドン・ジョバンニ》
21日	読書会推進企画「晴読雨読」第七弾
27日	カドベヤ ワークショップ「クリエイティブリテラシー&パーソナルライティング」
8日	慶應義塾大学コレギウム・ムジクム古楽アカデミー・オーケストラ演奏会
15日	慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・アカデミー声楽アンサンブル演奏会
11 17、24日	カドベヤ ティーチ・イン「コミュニティを考える」2 & 3 ダンス in コミュニティ
18日	慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・オーケストラ・合唱団演奏会
18日	教員サポート「学生相談室と共に考える学生対応」
20日	第8回所長・副所長会議
2日	神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座インタビュー「老いと身体—舞踏家 小林 嵯峨にきく—」
11 2日	学習相談秋学期反省会
6日	極東証券寄附講座 アカデミック・スキルズ プレゼンテーションコンペティション
9日	神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア ワークショップ
28日	第4回コーディネート・オフィス会議
2日	第2回運営委員会
22日	2017年度学習相談キックオフミーティング
11 24日	神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座「文化としての病と老い」2016年度業務完了報告書刊行
31日	教養研究センター選書16「ペルーの和食—やわらかな多文化主義」（柳田利夫）刊行
31日	教養研究センター選書17「ロシア歌物語ひろい読み—英雄叙事詩、歴史歌謡、道化歌」（熊野谷葉子）刊行
31日	2016年度アカデミック・スキルズ学生論文集刊行

慶應義塾大学教養研究センター
2016年度 活動報告書

2017年8月31日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 小菅隼人

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111(代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

編集・制作 慶應義塾大学出版会株式会社

印刷・製本 株式会社太平印刷社

Keio University



慶應義塾大学教養研究センター

Keio Research Center for the Liberal Arts

ISSN1880-361X

ISBN978-4-903248-53-0